

国立国会図書館 月報

NATIONAL
DIET
LIBRARY
MONTHLY
BULLETIN
2024.11



講演会「国立国会図書館の来た道、行く道」を開催しました

憲政資料室の新規公開資料から

本の森を歩く 第30回

一年を二十日で暮らすいい男？

国際子ども図書館展示会

「国際アンデルセン賞受賞作家・画家展」

国立国会図書館 月報

NO. 763
NOVEMBER 2024

CONTENTS

1 味わい深い手紙の闇汁
アンソロジー

—『手紙雑誌』第1巻第1号—
今月の一冊 国立国会図書館の蔵書から

5 講演会 「国立国会図書館の来た道、行く道」
を開催しました

12 憲政資料室の新規公開資料から

23 本の森を歩く 第30回

一年を二十日で暮らすいい男？
—国立国会図書館デジタルコレクションで楽しむ相撲—

31 国際子ども図書館展示会
「国際アンデルセン賞受賞作家・画家展」

21 館内スコープ

雑誌・新聞の生涯

—そのはじまりからおわりまで—

36 本屋にない本

『パブリックアート50年のあゆみ 文化・芸術に親しむ社会を目指して 1972-2022 50th anniversary』

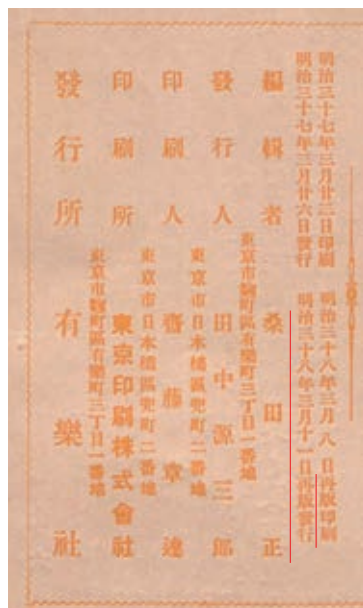
37 NDL Topics



表紙：「上野不忍 競馬會之圖」から
楊洲周延 筆 大倉四郎兵衛 明治18 [1885]
錦絵 3枚続
（『錦絵』所収）
<https://dl.ndl.go.jp/pid/1302981/1/3>

味わい深い手紙の闇汁^{アンソロジー} —『手紙雑誌』第1巻第1号—

い お ろい
五 百 蔵 謙



奥付部分

再版である当館所蔵本は編集者が桑田正とクレジットされているが、紅野謙介によると第1巻第1号の初版には、編集者は安孫子貞次郎とあるようだ。編集者は創刊から数号で桑田に交代した。



表紙

『手紙雑誌』第1巻第1号

有楽社, 1905.3 44p ; 18×26cm
<https://dl.ndl.go.jp/pid/10998716>

『手紙雑誌』は明治37(1904)年に創刊され、明治43(1910)年にかけて出版された雑誌である。その創刊号である第1巻第1号冒頭の「手紙雑誌の序」には、次のような一節がある。「此の雑誌は(中略)御手紙の闇汁の闇汁会で御座います。」

闇汁会は、めいめいが持ち寄った食材を暗闇で鍋に入れて煮込んだ何が入っているかわからない鍋(闇汁)を楽しむという、明治大正期の書生の間で盛んに行われた催しである。『手紙雑誌』とは何かを端的に表すのに、これほど適切な表現はない。

この雑誌は古今東西の有名人の手紙や、市井の人々の手紙を集めて掲載した書簡集である。更に『手紙雑誌』の刊行に寄せた手紙も掲載されている。「闇汁」を名乗るだけあって、掲載する手紙の選定には全く規則性がないように見える。また、時代や職業はもちろん、同じ人の手紙でも、似たようなテーマの手紙でも、掲載されている順番は一見バラバラである。ただし決して適当に作られたわけではなく、その構成は編集者によって考え抜かれたものである⁽¹⁾。

なお当館所蔵の第1巻第1号は明治38(1905)年3月に再版されたものであり、初版とは異なる点がある。当館所蔵本には目次があるが、同誌に着目して紹介を行った紅

『手紙雑誌』の2人の編集者

～安孫子貞次郎と桑田正～

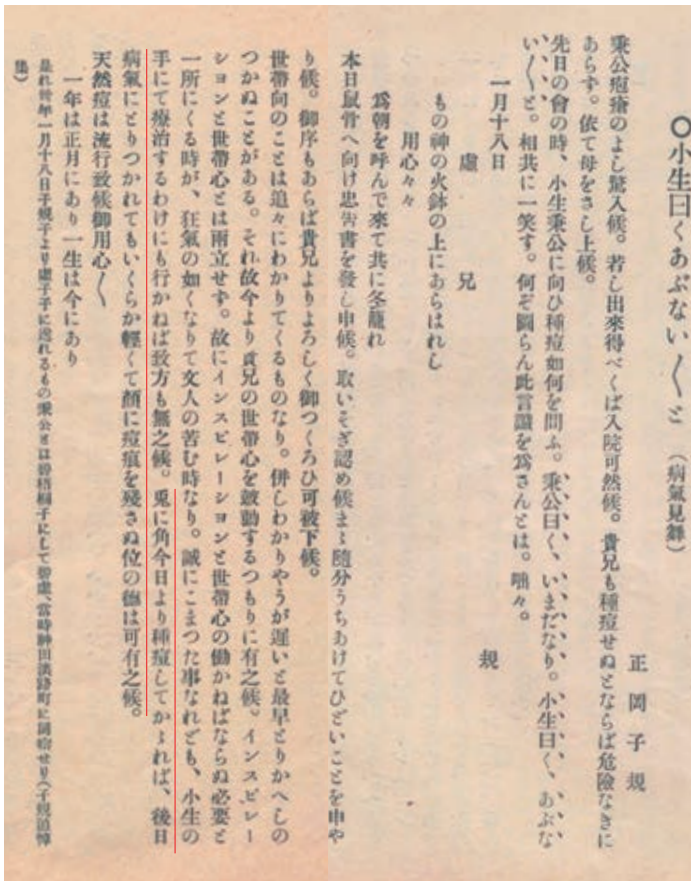
安孫子貞次郎は有楽社の雑誌編集者として、『東京評論』や『英文少年世界』などを手掛けた人物である。桑田正は『桑田春風』名義で詩人として活動し、詩壇引退後に『手紙雑誌』の編集に携わるほか、書簡文学の研究者として書簡に関する著作を発表している。ちなみに安孫子と桑田は友人であり、『手紙雑誌』第5巻第4号には、良縁に恵まれないと自虐する桑田に対して結婚相手を紹介する安孫子の妻はつ子の手紙が掲載されている。



安孫子貞次郎 (1873-1936)
画像出典：『グラフィック』第2巻第14号、有楽社、1910.7.
(<https://dl.ndl.go.jp/pid/2661426/1/6>)



桑田正 (1877-1935)
画像出典：『東金市史』総集篇5、東金市、1987.
(<https://dl.ndl.go.jp/pid/9644722/1/172>)



①正岡子規から高浜虚子への手紙

野謙介によると、初版は目次すらないという
間汁っぽいだったようだ。⁽²⁾

そんな『手紙雑誌』は、第1巻第2号の巻頭によると、編集者の友人たちからは「未曾有の珍雑誌」「余り雑然たり」などという評価を受けたが、各新聞紙上では「非常の御賛評」を得た。楽しく読める娯楽雑誌であるとともに、読者の書く手紙のお手本になったり、時事や歴史を学べたりすることが『手紙雑誌』の見所であると、編集者は述べている。

当時の読者の興味関心を惹く題材を集めていたことも、人気の秘訣だったのだろう。『手紙雑誌』が創刊された明治37(1904)年3月の関心事といえば、同年2月に勃発した日露戦争に他ならない。そのため掲載されている手紙には日露戦争に係ったものが少なくない。内容は戦況を伝えるものや、戦いに向かう決心を伝えるものが多い。大半は勇ましい内容であるが、中には出征する友人の無事を願う手紙や、家族を案ずる手紙もある。

また過去の戦争に関する手紙もいくつか掲載されている。小田原攻め陣中の豊臣秀吉から母である大政所への手紙や、大坂夏の陣に豊臣方として出陣する木村重成への妻からの手紙がある。またアメリカ独立戦争の総司令官となり戦地へ向かうジョージ・ワシントンが妻に宛てた手紙もある。それぞれ戦況や決

○手紙雑誌に寄する手紙

伊藤 銀月

拜啓、手紙雑誌御發行の事至極面白く思はれ候、小生などは天性の無精なる爲めか手紙を書くことを見角面倒臭がり、元來マブイ文章が手紙に於て一層マブク、到底手紙に就いて諸君の資格無き奴に候へど、一寸思ひ浮んだ事の二三つを申上候。

手紙の眞に巧なる人は、下宿屋龍城の學生諸君の中に見出さるべく候。一晚寝ずに五尋半の手紙を書いたなど云ふ豪傑が、小生學生時代には何處の下宿屋にも半ダースか四半ダースは轉がつて居りしものに候、是等の人の手紙が妙に郷里の親父殿を動かかし、親父殿よりも御袋を動かかし、御袋よりも多く御婆アさんを動かして、豫算以外の涙となり、月報以外の送金となり、牛鍋となり、女義太夫となり、吉原となり、我々が新聞雑誌に拙文を掲げて何の反響も無きに値する萬々にて候、別けて海老茶女史の中には、目に見えぬ鬼神をも泣かしむる手紙の名人あらるゝやに承り及び候、斯る無名の豪傑達に投書を慕はせられ候は如何に候や。

傾城の手紙は能く蔵の屋根を漏らしめ、人家を闇にするの魔力ある由に候へど、強ち手紙の巧みなるが爲めばかりには候まじ、之は小生が手紙論の問題外にて候。

今の名士諸君、代議士殿などには、往々珍無類の名手紙を書かれ候先生ありて、毎度新聞紙へ騎茶の種を寄與せられ候處、項羽流の負惜みは今の世に通用致さず、是等の諸先生にナト下宿屋龍城の豪傑達が長所を分けてやりたき程に候、手紙雑誌の發行は第一今の名士諸君に對して厚意なる友人を與ふるものに候へば、無理にも是等の諸先生に讀ませ度く、寧ろ買はせ度く候。

時節柄、從軍の將士兵卒より家鄉に送る手紙及び父母妻子より軍中の人に寄する手紙は、手紙雑誌の紙上に於て最も讀者に趣味を感せしむべきものと存じ候、此方面に材料を求むることお忘れなさるまじく、或は之を擬したる手紙なども面白かるべく候。

小生が知己友人の中手紙を書くに堪能なるは堺枯川君に候、又此人の如く手紙の趣味を愛すること深き者を見ず候、此人が言文一致の手紙の文は或點に於て天下一品に候、無論手紙雑誌の紙上へ此人の手紙を掲載するに御熱心なるべしと存じ候、友人にて目下米國に在る小川と申す男などは、故國の人と手紙を往復することを無上の樂樂と致し候程に、手紙を書くことが段々旨くなり、逢つて話をするより一層面白き手紙を送り來るやうに相成候、不足税の郵便物と云ふものは元來難有くなき性質のものに候へど、獨り此男よりの手紙に限りて、不足税ならぬ時は物足らぬ感じが起る程にて候、今度例の不足税が參り候はば、其中差支無き部分を手紙雑誌の材料に進呈可致候、神品とも稱すべき手紙を書き候ひしは、亡友畑山呂泣小生とは半分先輩にて半分友人と云ふやうな關係のありし人に候、此人は一種の天才の磨き損はれし如き妙な人物にて、時々否と筆より驚くべき光焰を放ちたりしが、就中手紙に於て彼の面目を窺ふべく候、呂泣の手紙の成物には、殆んど空前絶後にして何人も企つべからざる妙有之候、實例も挙げやに人の長所を比較評なす云ふ法は無之候へど、枯川君が若し手紙の上手なら呂泣は其の名人にて候、憾むらくは彼の手紙の断片だも保存せざる事に候、斯の如く、手紙も亦一の文藝にて、之に天賦あり、之に修養あり、名人、上手、下手の別を生ずること、他の藝術と異なる所無之候へば、之が爲に書籍あらざるべからず、雜誌あらざるべからざるは當然に候、而も手紙に關するの書籍は今日迄我々の目に觸るゝこと少なからざりしも、手紙の雜誌に至つては今日始めて其計畫あるを承り候、是れ小生が盛に貴誌を歡迎する所以に御坐候。

終りに臨んで、既に御心附きの事とは存じ乍らも蛇足を添へ候は、古人の手紙の面白きものを毎號二三つ宛掲載する事に候、これは文人の手紙のみならず、武骨なる亂世の英雄の手紙なども宜じかるべく、秀吉が小田原の陣中より淀君に寄せる手紙の如き、眞情流露却つて文字草句に拘泥せるものに優るの珍品も有之候、又山縣君の筆にて、西洋古今の名士の手紙を、原文譯文並べ掲ぐることを、是れは必ず願上度候。讀者

機々御注意千萬御座候事上候御注意の如く候、相始め可申候へ共中、思召す千が一にも及び由置候是れ謹言に訂き立て可申何分の御勘察伏して奉進し候

②評論家・小説家の伊藤銀月から手紙雑誌刊行に寄せる手紙

心を伝えたり、無事を祈ったりする内容であり、いつの時代も同じ気持ちを手紙に綴っていたことを知ることができる。

その一方、創刊直前に戦争が始まったことは、『手紙雑誌』の船出にとつては不安材料でもあった。国家の一大事にこのような不急不急の雑誌を出版してよいものか、発行を自粛した方がよいのではないかという意見があつたものの、「既に準備もした事ですから、なあにやってみます」という気持ちで世に送り出された。熱狂と不安が渦巻く戦時下だからこそ、このような楽天的な姿勢で作られた『手紙雑誌』は世間に受け入れられたのではないだろうか。

さて第1巻第1号に掲載されている手紙をいくつか紹介しようと思う。『手紙雑誌』という「闇汁」の風味を感じていただきたい。

①正岡子規から高浜虚子への手紙

当時（明治30年）、虚子と同居していた河東碧梧桐が天然痘に罹患した。それを聞いた子規が虚子の健康を案じ、種痘を熱心に勧めている。

②評論家・小説家の伊藤銀月から手紙雑誌刊行に寄せる手紙

手紙を最も巧みに書くのは親に金を無心する下宿生であるというユーモラスな指摘から始まり、從軍兵士の手紙を忘れずに取り上

驚き入候十日位は早からずや時節柄鐵砲とは殊更に賀す
べし名の「一」一生に幾何の經濟なりや計り知るべからず
流石は感入候本人成人の後必ず感謝に堪へざるべし姓と
名を形容せば床の間の「しよく」に枝珊瑚を置きたるに見
る如何や
早々家内相遣はし午後には小生も亦参るべく候へ共不取
敢お使まで勿々
武江兄
武江は安孫子貞次郎氏の號也
有樂生

中村有樂から安孫子貞次郎へ（返信）

今朝君と同行の約定の處御承知の御臺所昨夜第一
號を發行致し其爲め俄に参り兼ね候宜敷御承知可
被下候男也名を「一」と命じ候長たらしき姓と平均
致させ候積り也餘は面語勿々
二月二十四日朝
安孫子 貞次郎

安孫子貞次郎から中村有樂へ

③安孫子貞次郎の第一子出産に際して中村有樂との間で交わされた手紙

げるべき、歴史上の人物の手紙も載せるべき
といったアドバイスをしている。

③安孫子貞次郎の第一子出産に際して中村有
樂との間で交わされた手紙

編集者の安孫子が、有樂社社長の中村有樂
に第一子の誕生を報告する手紙と、出産を祝
う有樂の返事。第一子誕生のことを「第一
号を發行」したと表現する安孫子の出版人
ジョークが面白い。

④海軍少尉候補生南摩龍夫^{なんまたつお}から兄への手紙
戦艦富士の乗員として旅順口攻撃に参加し
た南摩龍夫が、戦況を中学教諭の兄の綱夫へ
報告している。戦闘開始時の高揚、敵艦から
の砲撃で死傷者が出た絶望、戦闘を生き延び
たことへの安堵など、戦場の様子がひしひし
と伝わってくる。

⑤世界の絵葉書

ロシア、フランス、イタリア（現・南アフリカ
共和国の一部）、アメリカ、日本の絵葉書が
掲載されている。

⑥「とき」から「茨の君」への手紙

「とき」という女性から、生き別れた恋人「茨
の君」への手紙。ときは、東京で茨の君と別
れて田舎に帰ってから二年が過ぎ、茨の君へ
の想いと都会での自由な生活への憧れを持ち
ながら、他の相手と結婚することになった。
ときは茨の君に返信を求め、解説でも「次号

では茨の君からの返事あるべし」とあるが、
残念ながら掲載はされておらず、この後二人
がどうなったかは分らずじまいである。

『手紙雑誌』の創刊から百年以上が経ち、
電子メールやSNSが普及するなど、情報を
伝える方法は大きく変化した。しかし、気持
ちを相手に伝えたいという人間の思いは、当
時も今も変わらない。『手紙雑誌』という「闇
汁」から感じる味わい深さは、今なお健在で
ある。

- 1 第1巻第3号は「名媛書翰」、第1巻第7号は「家庭書翰」を
特集するなど、号によっては決まったテーマに基づいて選定
されているものもある。また、第2巻以降は巻頭に手紙につ
いての寄稿記事を掲載するなど、性質が変わっている。
- 2 紅野謙介「『手紙雑誌』と『東京バック』—有樂社にみる編集
の思想」『季刊 d/SIGN デザイン』8号, 2004.7, pp.92-95 <請
求記号 Z71-F555>
- 3 「稟告」『手紙雑誌』第1巻第12号, 1905.3
<https://dl.ndl.go.jp/pid/10998724/1/3>

講演会

「国立国会図書館の来た道、行く道」 を開催しました



左から、山地当館副館長、登壇者の長尾氏、登壇者の中井氏、登壇者の永江氏、登壇者の竹内当館収集書誌部長、吉永当館館長（当時）

令和6年3月14日（木）、国立国会図書館は、講演会「国立国会図書館の来た道、行く道」を開催しました。

講演会では、昨年出版された国立国会図書館の歴史に関する二つの著作『帝国図書館—近代日本の「知」の物語』及び『夢見る「電子図書館」』の各著者に講演いただきました。後半では、出版流通論、近代出版文化史に詳しい著述家の永江朗氏をモデレーターとし、歴史を踏まえた当館の今後の方向性について、当館職員も参加してパネルディスカッションを行いました。

この記事では、講演会の概略をご紹介します。

長尾宗典氏講演

帝国図書館の遺産―国立国会図書館に引き継がれたもの―



長尾 宗典 氏

筑波大学人文社会系准教授。筑波大学大学院博士課程人文社会科学科歴史・人類学専攻単位取得退学。博士（文学）。国立国会図書館司書、城西国際大学国際人文学部准教授を経て現職。
主な著作に『〈憧憬〉の明治精神史』（ぺりかん社、2016）、『帝国図書館―近代日本の「知」の物語』（中央公論新社、2023）などがある。

国立国会図書館には二つの源流があります。一つは帝国議会の図書館、つまり貴族院と衆議院に置かれたものです。もう一つは、本日の私の話の中心となる帝国図書館です。本日は、この帝国図書館が日本のナショナルライブラリーとして果たしてきた役割とその歴史、そして国立国会図書館への統合について概観します。

帝国図書館とは何か

帝国図書館は1897年に帝国図書館官制によって設立され、文部大臣の管理下に置かれました。その源流は1872年に設置された書籍館^{しよじやくかん}で、1875年に東京書籍館に改組された後、1880年に東京図書館と改称、1885年に上野に移転します。帝国図書館設立後の1906年に現存のレンガ造りの建物が完成しました。帝国図書館の理念については、東京図書館から帝国図書館にかけて長く館長を務

めた田中稲城^{いなぎ}や東京帝国大学教授の外山正一^{とやままさかず}、評論家の三宅雪嶺^{せつれい}らがそれぞれ重要な意見を述べていました。田中は、国立図書館が必要な理由として、国内で出版された図書記録の保存は国家の責任であることを強調しました。利用者は学生や受験生が多く、女性利用者のための婦人閲覧室も設けられていました。

「国立図書館」の模索

国立図書館とはそもそも何なのか。1970年のユネスコ総会で採択された「図書館統計の国際的な標準化に関する勧告」^①によれば、国立図書館には、納本制度による国内出版物の網羅的な収集・保存、国内で出版された出版物の目録（全国書誌）の作成、その国に関する外国文献の収集等の機能が期待されています。しかし、戦前の日本には、公共図書館とは異なる、これらの機能について社会の理解は広がりませ

ませんでした。帝国図書館は常に予算不足に悩まされ、当初の計画通りに建物は完成せず、書庫もひっ迫していました。戦前の納本制度は内務省が検閲のために行ったもので、帝国図書館への直接の納本は実現しませんでした。帝国図書館は内務省から検閲済の本の交付を受けつつ、国内の新聞や日本の歴史文献、貴重な個人文庫等の収集に努めました。収集した図書は、甲部（目録に載せ利用提供）、乙部（とりあえず保存し、後に判断）、丙部（1年で廃棄）に分類しました。乙部は戦後に国立国会図書館に引き継がれた上で再整理され、利用に供されています。1930年代以降は、博士論文の収集など専門資料の収集も進めました。

国立国会図書館への道

戦後、帝国図書館は図書館政策の中心として再建を模索しました。しかし、1948年に国立国会図書館法が公布

中井万知子氏講演

データを拓く。



『帝国図書館—近代日本の「知」の物語』(中央公論新社、2023)

されると、1949年4月に国立図書館(帝国図書館から改称)は支部上野図書館として国立国会図書館に統合されました。1961年に現在の東京本館の建物が竣工した後に、旧帝国図書館の蔵書約100万冊が永田町に移転されました。

おわりに

帝国図書館は、予算不足及び政府当

局や国民の理解不足により、完全な形では実現しませんでした。それでも、必ずしもすぐに整理・提供できない資料も含めて収集に努め、その蔵書は関東大震災や東京大空襲を乗り越え、戦後に引き継がれました。

現在、国立国会図書館のビジョン

に「デジタルで全ての国内出版物を読める未来」を目指すとあります。私も日々、帝国図書館の遺産がデジタル化

され利用できることのありがたさを噛み締めています。デジタル化から漏れた未収の資料はどうなるのかということが心配です。日本の近代史を研究している立場からは、国立国会図書館においても幅広く集める努力を一層進めていただけるとありがたいです。

国立国会図書館の電子化への道 — 書誌情報から電子図書館へ —

私が『夢見る「電子図書館」』を書いたのは、1975年の国立国会図書館入館後、様々な業務に携わった中で、電子図書館プロジェクトの誕生と成長を見届けられたことは得難い経験だったと思ったからです。本日は国立国会図書館の成立に遡り、そのデータへの取り組みから話を進めることにします。

私が『夢見る「電子図書館」』を書いた

国立国会図書館の誕生

国立国会図書館の二つの源流のうち、帝国議会の図書館について言えば、貴族院と衆議院のそれぞれに図書館は設けられていましたが、本格的な議会図書館設置の要求が実を結んだのは戦後のこととなります。

1947年5月の日本国憲法の施行と同時に国会法も施行され、まず「国

会図書館」が設置されました。その後の検討を経て、1948年2月に国立国会図書館法が成立しました。成立時の国会演説では、「真理が我らを自由にする」という理念、そして「知識の泉」、「立法のブレイン」、「整理の元締」といった三つの機能がうたわれています。国立国会図書館法には、日本の出版物を集める納本制度、全出版物



『夢見る「電子図書館」』（郵研社、2023）

中井 万知子 氏

1975年から2013年まで国立国会図書館に勤務。目録作成業務等を経て、電子図書館事業の立ち上げに携わる。関西館長、利用者サービス部長等を歴任。退職後、2022年まで立正大学文学部特任教授（図書館司書課程）。2015年から日本図書館協会分類委員会委員長。著書に『夢見る「電子図書館」』（郵研社、2023）。



の目録さらに総合目録の作成など、国立図書館としての機能が盛り込まれたのです。

書誌情報のフロンティア

先ほどの三つの機能のうち、「整理の元締」というのはややわかりづらいかもしれませんが、これは他の二つの機能の前提条件でもあり、資料や情報を集めて整理し、提供できるようにすること、さらには日本の図書館全体の整理のセンターとなるべきということだと思えます。その背景には、当時高まりつつあった国際書誌コントロールへの関心がありました。国立国会図書館にとって、国際的な書誌改善の動きは大きな刺激となり、1950年代から印刷カードの頒布、「全国書誌」と呼ばれる国内出版物の目録の刊行等を開始しました。そして、コンピュータの導入により、1981年には『日本全国書誌』のデータ版JAPAN/MARCの提供を開始し、書誌情報のデータ化が進行しました。

電子図書館プロジェクトの始まり

1980年代、国立国会図書館の職員だった田屋裕之が翻訳した『紙から

エレクトロニクスへ』⁽⁴⁾に象徴されるように電子通信技術の発展はめざましく、1990年代には長尾真の『電子図書館』⁽⁵⁾が刊行されるなど、デジタル情報を活用した電子図書館への関心が高まります。1994年から通商産業省の実証実験として「パイロット電子図書館」が始まると、国立国会図書館も協力事業のパートナーとして、資料デジタル化などの実験に乗り出しました。

1998年5月には「国立国会図書館電子図書館構想」⁽⁶⁾を策定し、2002年の関西館設置に向けて取り組むことになりました。私は2000年から、総務部企画課電子図書館推進室で明治期刊行図書のリファレンスやネットワーク情報資源の収集計画などを担当しました。

2002年4月には関西館が設置され、電子図書館課が発足し、10月の開館以降、電子図書館サービスとして「近代デジタルライブラリー」、WARP（現在の「インターネット資料収集保存事業」）などを次々に公開しました。

電子図書館の発展

2007年に長尾真が館長に就任し、電子図書館の機能強化が進みまし

た。著作権法の改正により、著作権処理を前提とせずに保存のためのデジタル化が可能になり、補正予算が計上され、大規模デジタル化が実施されました。また、国立国会図書館法の改正により、公的機関のウェブサイトや民間のオンライン資料の制度収集が可能となりました。2020年にはジャパネットサーチが正式公開されています。⁽⁷⁾

おわりに

国立国会図書館は設立以来、「知識の泉」、「立法のブレイン」、「整理の元締」といった基本機能を時代に合わせアップデートしてきました。そのためには、まずは実験し、計画化・事業化し、提供して皆さんに見てもらわないといけない。ようやく制度化できて運用する中で更なる課題を抽出するということの繰り返しです。増えていく関係者との協議・協力は欠かせませんし、災害が起きた時は社会の要請にどう対応するかといった課題もあります。今後も実験と計画を繰り返しながらい進め、発展することを期待しています。

パネルディスカッション

パネルディスカッション登壇者

モデレーター：永江 朗 氏（著述家）

パネリスト：長尾 宗典 氏（筑波大学人文社会系准教授）

中井 万知子 氏（日本図書館協会分類委員会委員長）

竹内 秀樹（国立国会図書館収集書誌部長）

永江氏 楽しい講演でした。ライブで聞くとYouTubeのように分かりやすく、エッセンスが伝わりやすいと感じました。これは書籍の自己否定かもしれない（笑）。まずは感想を聞かせてください。

中井氏 自著の初校を終える頃に長尾さんの本を読み、日本図書館協会が1929年に国際図書館連盟に加盟していたことを知りました。本の情報量と質に感心しました。

長尾氏 私も中井さんの本から多くを学びました。ご自身の経験を交えた内容で、今日の講演でさらに理解が深まりました。

永江氏 国立国会図書館にこんな歴史があったとは、多くの人は知らないですよね。さて、パネルディスカッションには国立国会図書館の現役職員である竹内収集書誌部長にも参加いただいているので、国立国会図書館の現在地について、少しお話を伺いたいと思います。

竹内 国立国会図書館は現在、デジタ

ルシフトを掲げたビジョン⁽⁸⁾に基づいて活動しています。このビジョンは中期的な基本方針として、社会のデジタル変革に必要な情報インフラの整備を進め、国立国会図書館の機能を強化することを目指しています。

国立国会図書館の所蔵資料数は約4700万点で、英米仏の国立図書館に比べて歴史が浅い割に蔵書の規模は大きく、日本における出版活動の活発さ、出版文化の豊かさを示すものだと思います。お二人の講演中でも触れられましたが、国立図書館が果たすべき機能については、現在、国際的に共通した理解があり、最も本質的な機能は、納本制度により国の出版物を網羅的に収集・保存することで、その目的は国の文化を保存・伝達し発展させることにあります。第二の機能は、収集した国の出版物の記録、つまり全国書誌を作成することです。いずれの機能も、出版がデジタルへと広がってきたことに合わせて拡張してきました。

納本制度に関しては、2000年に、



永江 朗 氏

1958年生まれ、北海道旭川市出身。法政大学文学部卒。1981年～1988年、書籍輸入販売会社に勤務。1989年～1993年、「宝島」「別冊宝島」編集部。フリーランスのライター兼編集者を経てライター専業に。著書に『インタビュー術！』『私は本屋が好きでした』『小さな出版社のつづけ方』など。

CDやDVD等のパッケージメディアに記録された電子出版物を納本対象に加えました。その後、公的機関のウェブサイトの収集を開始し、昨年には有償で頒布されている電子書籍・電子雑

誌の収集を開始することができました。デジタルの出版物は多様で数も膨大であり、一つの機関で網羅的に収集することは事実上困難なため、国立情報学研究所、大学、科学技術振興機構、出版業界団体と連携・分担して収集・保存し、検索と利用は国立国会図書館サーチ^①で一元的に行えるようにしています。国立国会図書館サーチは拡張さ



竹内 秀樹

1993年国立国会図書館入館。電子情報部電子情報サービス課長、同電子情報流通課長、収集書誌部主任司書、利用者サービス部科学技術・経済課長、総務部管理課長、利用者サービス部サービス企画課長、総務部副部長人事課長事務取扱を経て、2023年4月から現職。

れた全国書誌とも言われ、このような形で全国書誌の機能も拡張してきました。

永江氏 竹内部長、ありがとうございます。たくさんのご質問をいただきましたので、いくつか取り上げたいと思います。

Q1 国立国会図書館のルーツには国立図書館と国会図書館の二つがあったことですが、このことは現在の国立国会図書館にどのような影響を与えていますか。

長尾氏 国会に属する機関となることで国立図書館のプレゼンスが上がったと思います。戦後の国立国会図書館長は戦前の帝国図書館長よりも地位が高く、戦後史の中で、国立の図書館が果たすべき機能を実現する上で有効に働いた面があるのではないかと考えています。

竹内 国立国会図書館が、国会議員の立法活動の補佐という役割を果たす上で、最大の強みは、それが国立図書館の基盤の上になされていることです。国立図書館としての基本機能である納本制度によって築かれた包括的なコレクションが国会議員へのサービスに大

きく貢献しており、特に、各種制度の調査や海外事情の調査などでその強みが生かされています。一方で、国会の図書館であるものの、国立図書館としては「国民のための図書館」であり、欧米の国立図書館よりも国民に開かれた図書館になっていると思います。

Q2 デジタル化やサービスのデジタルシフトが、出版や紙の本の文化に与える影響についてはどう思いますか。

竹内 紙の本の文化の継

承は、国立図書館の根本的な任務であり、デジタル化は原本保存のための有効な手段です。また、デジタル化により、国内の出版物へのアクセスが容易になれば、知の再生産にも貢献すると思います。ただし、それが出版のエコシステムを阻害するようなものであってはいけませんので、商業出版物については市場を阻害しないよう、関係者と合意形成できた範囲内で提供するこ

とを基本方針としています。国立国会図書館サーチでは各出版物の入手先も案内しています。購入、貸出を問わず、出版物の利用が全体として活性化されるようにしていくことが大切で、それに寄与していきたいと思っています。

中井氏 2000年頃にデジタル化資料の利用提供を始める時、出版関係者の皆様に説明する機会がありました。出版界からは、複製版などの出版が阻



パネルディスカッションの様子

来た道、 行く道

害されるのではないかといった戸惑いを感じられました。その戸惑いは現在も続いているようです。当時、古いものが顕在化することによってそれらへの需要が生まれ、かえってビジネスチャンスになるという説明もありました。そういうものを一緒に掘り出していくきっかけにもなればと思います。

永江氏 個人的な経験ですが、コロナ禍の時期に『文豪と感染症―100年前のスペイン風邪はどう書かれたのか』というアンソロジーを出版しました。主に国立国会図書館にあるデータを使ったのですが、ここに知のストックがあるから実現できたことで、先人の書いたテキストで印税を頂いたという意味ではうまく繋がっていると思います。著者の立場だと使われるばかりというイメージを抱きがちですが、ここにある知のストックを使えば創造に繋がりが、うまくいけばお金にも繋がります。

Q3 中井さん、長尾さん、今後の取組としてどのようなものを期待されていますか。

中井氏 情報が溢れる中で、それらを

システマティックにコントロールし、将来に向かって橋渡ししていくことが国立国会図書館の役割です。そのためには、やはりメタデータは重要で、書誌情報を作り、様々なデータを繋いでいく役割が必要です。全文検索技術のような、新しい技術も書誌コントロールの中にもつと生かしていけないかと考えています。

長尾氏 デジタル化資料の公開数が、この20余年で飛躍的に増加しています。20年前は考えられなかったことが今実現しており、次の20年後については想像が及びません。本や読書、あるいは知識を仕入れるやり方自体が劇的に変化しているかもしれない。1月に新しい国立国会図書館サーチを見た時も感動しましたが、様々な形態の情報について、とにかくその存在を国民に示すということに、これから力を入れていただきたいです。

Q4 竹内部長、デジタル社会における国立国会図書館の役割はどういうものになるでしょうか。

竹内 国立図書館は、国の記憶を保存し、後世に伝えるための社会装置です。

国内の多様な出版物を国としてきっちり保存していくということが、国立図書館としての責務を果たすことになるでしょう。ですから、まずは全体をなるべく広く保存していくということ、次に、それを後世に伝えるとともに、日本の出版物の総体を記録し見える化していくこと、それが今後も変わらぬ当館の役割と考えています。今後出版の形が進化し続ける中で、これらの責務を果たし続けるためには、出版界をはじめ、関係機関との連携がますます重要になってくると考えています。

永江氏 講演を通じて、国立国会図書館は、歴史的に試行錯誤、紆余曲折、暗中模索を繰り返していたのだと感じます。これからも人類の知的遺産をどのように継承していくかが重要な課題であり、今後の進展に期待しています。中井さん、長尾さん、竹内部長、ありがとうございました。

注

- 1 鈴木平八郎『国立図書館 近代的機能の展開』丸善、1984、ギ・シルヴェストル著、松本慎二訳『国立図書館のガイドライン』日本図書館協会、1989
- 2 羽仁五郎（はにごろう）参議院図書館運営委員長による1948年2月4日参議院本会議における国立国会図書館法案についての委員長報告「第2回国会参議院会議録」第11号（<https://kokai.ndl.go.jp/bxt/100215254X01119480204>（国会会議録検索システム））
- 3 中村嘉壽（なかむらかじゅ）衆議院図書館運営委員長による1948年2月4日衆議院本会議における国立国会図書館法案についての趣旨弁明「第2回国会衆議院会議録」第15号（<https://kokai.ndl.go.jp/bxt/100205254X01519480204>（国会会議録検索システム））
- 4 F.W. ランカスター著、田屋裕之訳『紙からエレクトロニクスへ 図書館・本の行方』日外アソシエーツ、1987
- 5 長尾真『電子図書館』（岩波科学ライブラリー15）岩波書店、1994
- 6 「国立国会図書館電子図書館構想」（<https://dl.ndl.go.jp/pid/1000791>）
- 7 当館の電子図書館事業の沿革については当館ホームページ「電子図書館事業の沿革」（<https://www.ndl.go.jp/jp/dlib/project/history.html>）もご参照ください。
- 8 「国立国会図書館ビジョン 2021-2025 - 国立国会図書館のデジタルシフト -」（https://www.ndl.go.jp/jp/aboutus/vision_ndl.html）
- 9 「国立国会図書館サーチ」（<https://ndlsearch.ndl.go.jp/>）

憲政資料室の新規公開資料から

国立国会図書館は、近現代の政治家、官僚、軍人らの所有していた個人文書を集めた「憲政資料」を所蔵しています。このたび東京本館憲政資料室で新規に公開した資料をご紹介します。

憲政資料は主にご子孫などからの寄贈によって収集した資料から構成されており、整理や目録作成を経て一般に公開されています。政治史をはじめ様々な分野の調査・研究を支える貴重なコレクションの魅力の一端を味わっていただければ幸いです。

(利用者サービス部 政治史料課)

憲政資料室のご案内 (東京本館 本館4階)

「憲政資料」のほか、第二次世界大戦終了後の連合国による日本占領に関する米国の公文書を中心に集めた「日本占領関係資料」、主に北米・南米への日本人移民に関する資料を集めた「日系移民関係資料」を扱っています。

憲政資料室の利用方法、所蔵資料の概要については、国立国会図書館ホームページ「憲政資料室」(<https://www.ndl.go.jp/tokyo/constitutional/index.html>)、今回紹介する資料を含む憲政資料の概要については、リサーチ・ナビ「憲政資料 (憲政資料室)」(<https://ndlsearch.ndl.go.jp/navi/kensei>)をご覧ください。



憲政資料室

Souvenir des Membres de la Legation (憲政資料室収集文書一五〇九)

(二冊 令和六年一月公開)

明治二三(一八九〇)年に駐フランス日本公使館の館員から田中不二麿夫妻へ贈られた記念写真帳です(写真1)。田中は、明治一七年に駐イタリア公使として欧州へ渡った後、明治二〇年に駐フランス公使に転じて約三年間務め、帰国するところでした。

写真には、田中と同時期に欧州にいた人物が見られます。たとえば、西郷隆盛の弟・西郷従道(写真2)は海軍大臣在任中に欧州視察を行い、田中が公使を務めていた頃のイタリアにも立ち寄りました。また、秋山好古(写真3)は当時フランスに留学していた陸軍軍人で、後に日露戦争で活躍し、現代では司馬遼太郎『坂の上の雲』の主人公の一人としても知られています。

田中不二麿 (1845-1909)

弘化2(1845)年、愛知生まれ。尾張藩で尊攘派志士として活躍。明治4(1871)年岩倉使節団に随行。帰国後に文部大輔となり、明治12年教育令を制定。その後、司法卿、駐イタリア公使、駐フランス公使、枢密顧問官、司法大臣等を歴任。明治42年死去。

肖像写真の出典:『子爵田中不二麿伝 尾藩勤王史』咬菜塾, 1934
(<https://dl.ndl.go.jp/pid/1234667/1/11>)



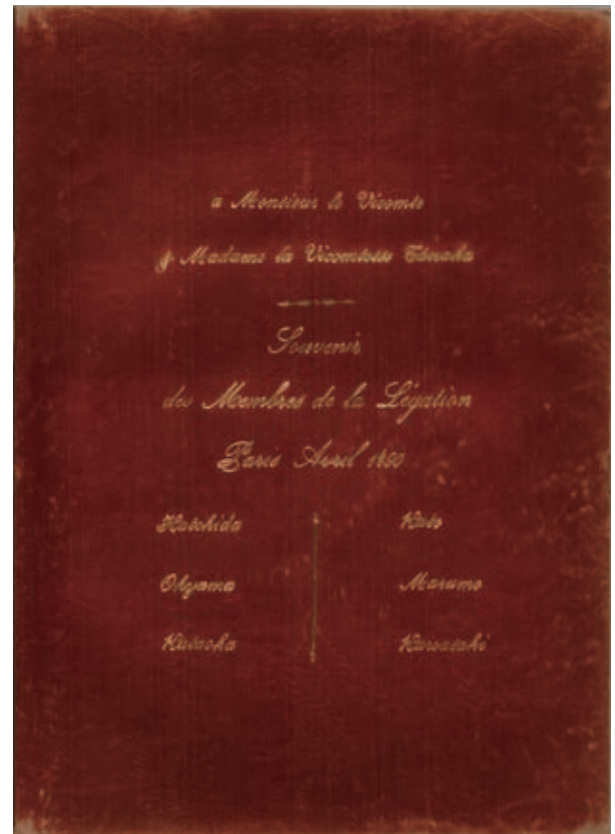


写真1 標題紙（上）と表紙（左）



写真3 秋山好古



写真2 西郷従道

交友書簡集（憲政資料室収集文書三九二）

（二巻 令和五年八月公開）

この資料は、明治期から昭和初期にかけての書簡二二通が二巻の巻物に仕立てられたものです。巻物の箱書き（写真4）に「神藤蔵」とあり、神奈川県選出の衆議院議員だった神藤才一（一八五七―一九三四）が所蔵していたものと思われます。そのうちの一通に、小幡西吉の書簡があります（写真5）。小幡は大正二（一九一三）年二月当時、中国・天津の総領事を務めていました。神

藤への書簡には「共和之前途依然暗澹タル有様」（傍線A）と記し、前年に成立したばかりの中華民国の混沌とした社会情勢を伝えています。また、大正政変後の日本の政治状況に触れ、立憲政友会と立憲同志会（後の憲政会）という「二大政党之発現」（傍線B）に期待を寄せています。



写真4 巻物の箱書き

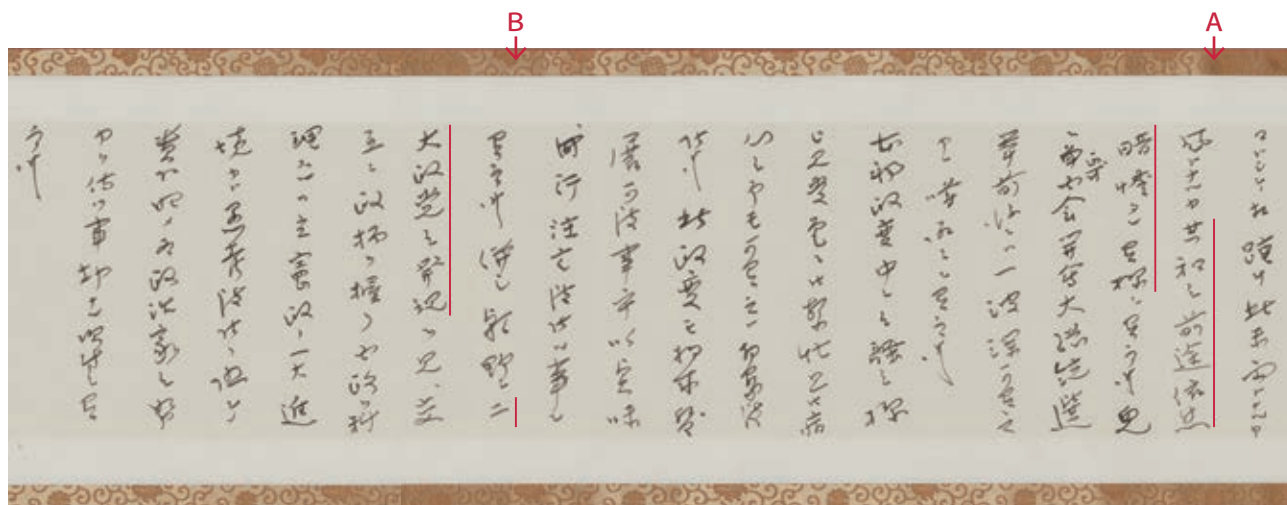
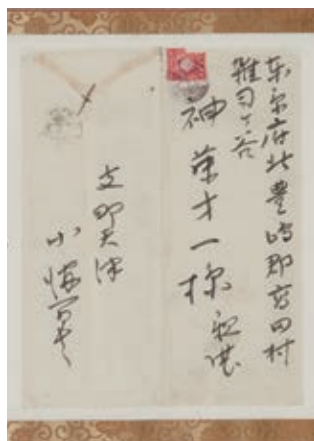


写真5 小幡西吉書簡 神藤才一宛（大正2年）2月11日 <憲政資料室収集文書392-2-3>



小幡西吉（1873-1947）

明治6（1873）年、石川生まれ。外交官として主に中国（清朝・中華民国）での在外公館勤務を重ね、大正7（1918）年には駐中華民国特命全権公使に就いた。退官後は貴族院議員などを務めた。昭和22（1947）年死去。

肖像写真の出典：『貴族院要覧 昭和12年12月増訂 丙』貴族院事務局，1937
(<https://dl.ndl.go.jp/pid/1653722/1/111>)



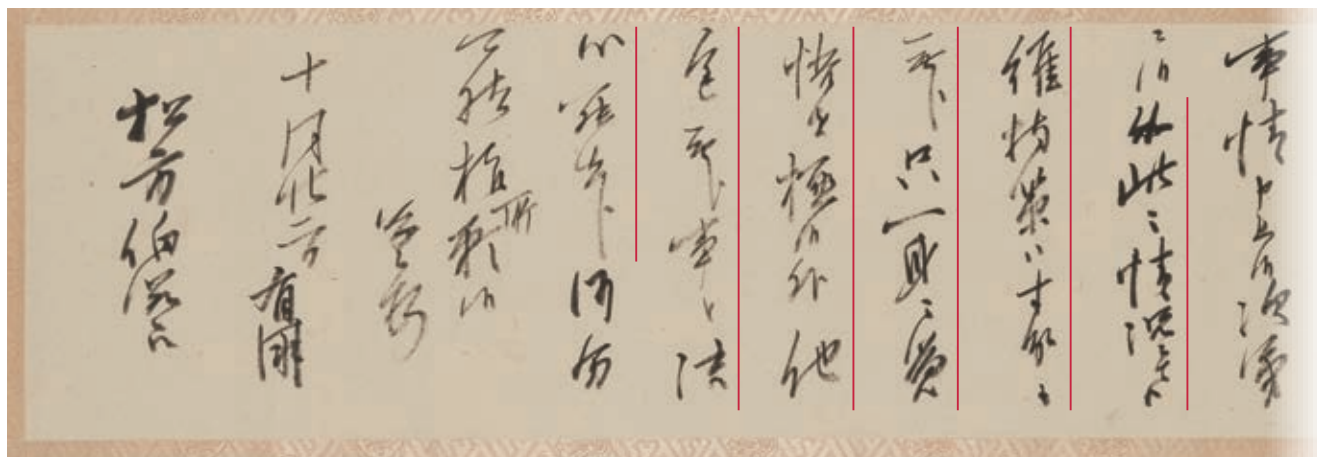


写真6 山県有朋書簡 松方正義宛（明治22年）10月22日 <憲政資料室収集文書408-1-5>

含雪山県公尺牘（憲政資料室収集文書四〇八）

（二巻七通 令和六年四月公開）

翌年に初めての帝国議会が開会される明治三二（一八八九）年一〇月二日に、山県有朋（内務大臣）は、欧州視察（明治二十二年一月出發）から帰国しました。その頃、黒田清隆内閣は条約改正問題により、閣内不統一で混乱していました。同月

結局、同月二五日に、黒田は辞任し、内大臣であった三条実美が首相を兼務していましたが、二か月後の二月二四日に山県が首相の職に就きました。

一八日には、大隈重信外務大臣が爆弾を投げつけられる事件も起こります。同月二二日に黒田首相は、天皇に首相以下の辞表を奉呈しつつ、黒田自身のみが職を辞め、他の大臣はそのまま、山県を後継首相とすることを奏上しました。同月二四日には他の大臣も同様に山県を推します。しかしながら、この時には山県はその職を引き受けませんでした。渦中の山県は松方正義に、「如此之情況にては維持策は寸分も無之只一身に覚悟を極候外他意無之事と決心罷在申候（この状況では、このままではだめで、覚悟を決めるしかほかにはないと存じています）」（写真6（傍線）と、その心中を伝えています。

山県有朋（1838-1922）

天保9(1838)年、山口生まれ。松下村塾に学び、奇兵隊の軍監として活躍し、戊辰戦争に従軍。明治維新後、陸軍の創設、徴兵令施行、軍人勅諭の発布など軍制の整備に努めた。内務大臣、司法大臣、総理大臣、枢密院議長を歴任し、元帥陸軍大将。元老として国政に重きをなす。大正11(1922)年に死去。「含雪」は号。

肖像写真の出典：『公爵山県有朋伝 中巻』山県有朋公記念事業会，1933
(<https://dl.ndl.go.jp/pid/1241277/1/567>)



松方正義（1835-1924）

天保6(1835)年、鹿児島生まれ。幕末期は京坂間を往復して政局にかかわり、明治維新後は国家財政の確立に尽力。大蔵卿、大蔵大臣、総理大臣を歴任し、財政指導者として功績を残す。枢密顧問官、内大臣にも就き、元老として活動。大正13(1924)年に死去。

肖像写真の出典：『公爵松方正義伝 乾巻』公爵松方正義伝記発行所，1935
(<https://dl.ndl.go.jp/pid/1224025/1/499>)





写真7 (右) 当館に運び込まれた当時の状況です。30箱以上の段ボール箱に詰められていました。ここから数年かけて資料1点ずつの確認と目録の整備を行いました。(上) 今では、1点ずつ中性紙製の封筒に収納して書庫で大切に保存されています。



あわやゆうぞう 淡谷悠蔵関係文書

(八七六五点 令和五年二月公開)

八七六五点という膨大な資料群です(写真7)。旧蔵者の淡谷悠蔵は、故郷の青森県などで政治活動を行った後、通算6期にわたり衆議院議員を務めた日本社会党の政治家で、文筆家でもありました。「ブルースの女王」と呼ばれた歌手・淡谷のり子(一九〇七―一九九九)の叔父にあ

たる人物でもあります。

この資料群には、青森県内を中心とした各所からの要望や陳情とともに、農林省などの国の機関や県によつて作成された、第一次産業などに関する政策資料が多く含まれます。代議士として地元の声を国政に届けるため、積極的に手元に集めて

いたものかもしれません。

このほか、一九七〇年代に社会問題となった成田空港問題(三里塚闘争)に関する資料(写真8)などが含まれており、彼の政治活動や当時の社会事情の一端をうかがい知ることができます。

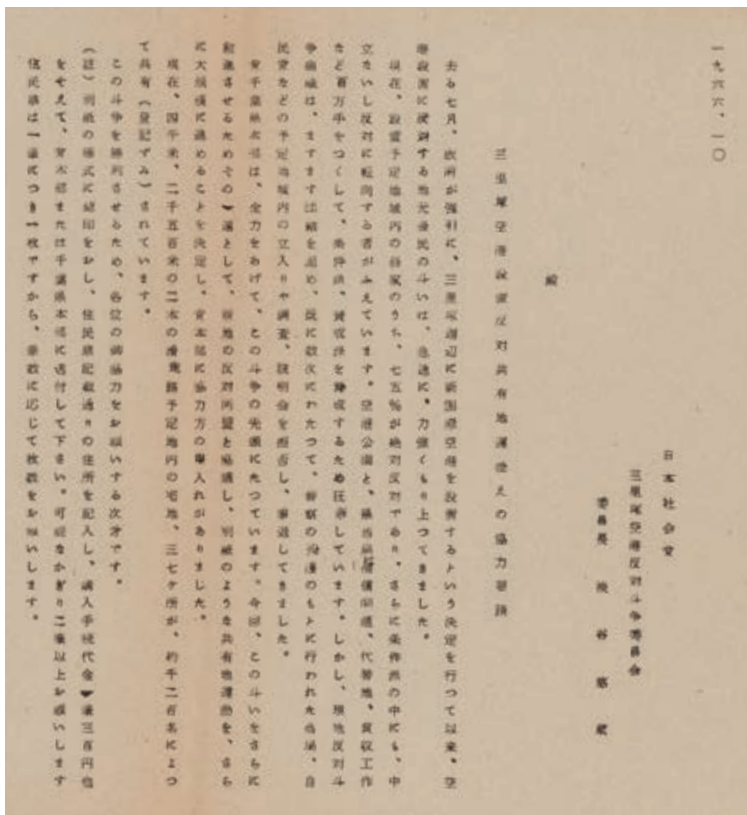


写真8 三里塚空港設置反対共有地運動会の協力要請<淡谷悠蔵関係文書1795-1>

淡谷悠蔵 (1897-1995)

明治30(1897)年、青森生まれ。青森県新庄村村会議員などを経て、昭和28(1953)年、日本社会党から出馬し第26回衆議院議員総選挙で初当選。通算6期16年にわたり国政で活動した。党内では機関紙局長、青森県連会長などを歴任し、昭和44年に政界引退。引退後は故郷で青森県文芸協会理事などを務めた。平成7(1995)年、98歳で死去。

肖像写真の出典：『22人の政治家』内政図書出版、1956
(<https://dl.ndl.go.jp/pid/2988047/1/14>)



石橋湛山（1884-1973）

明治17(1884)年、東京生まれ。早稲田大学哲学
科卒業後、東洋経済新報社に入社。「小日本主
義」等、自由主義的言論で知られた。戦後は大
蔵大臣として第1次吉田内閣に入閣、戦後の経
済復興に尽力するが、公職追放該当者に指定
される。政界復帰を経て、昭和31(1956)年、内
閣総理大臣。晩年は日中・日ソ交流に尽力し、
昭和48年に死去。

肖像写真の出典：「近代日本人の肖像」
(<https://www.ndl.go.jp/portrait/datas/383/>)



石橋湛山関係文書（その二）（二〇二三年追加分）

（四二点 令和六年三月公開）

既に所蔵していた石橋湛山関係文
書に追加で寄贈された、湛山の日記
等を新たに公開しました。この資料
群の存在は、鎌倉の邸宅で東京大空
襲を免れたものとしてつとに知られ
ており、石橋湛一・伊藤隆編『石橋
湛山日記（みすず書房、二〇〇一年）
に未収録の資料を含んでいます。

昭和三一（一九五六）年一二月
一四日、石橋湛山、岸信介、石井
光次郎の三者は、自由民主党初代総

裁・鳩山一郎の後継の座を争いまし
た。第一回投票では、三者ともに過
半数の票を獲得できず、一位の岸と
二位の湛山で決選投票を行った結
果、石井陣営の支持をうけた湛山が
わずかに七票差で逆転勝利します。

毎日記されていた日記ですが、こ
の総裁選の日から記述が途絶え、翌
年元日によろしく、昨年の総裁選と
首相就任について記されます（写真
9）。総裁選勝利の狂騒、そして閣

僚人事に頭を悩ませる多忙な日々
を、一二月の空白のページが静かに
物語っているようです。

約三週間後、ふたたび日記は途絶
し、湛山は病に倒れます。予算審議
に出席が見込めなくなった湛山は、
二月二三日に「私の政治的良心に従
います」という有名な言葉で辞任を
表明し、二月二五日、就任からわず
か二か月余で首相の座を退きまし
た。

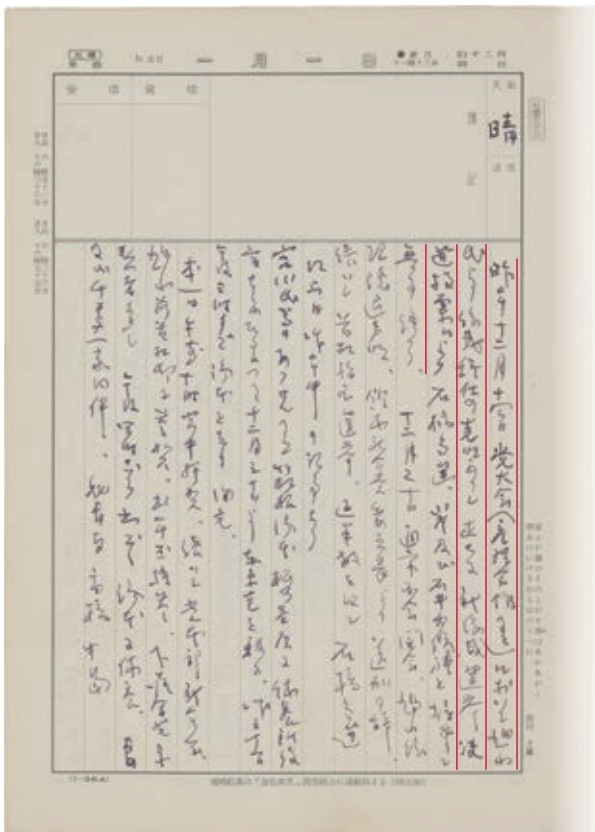


写真9 〔日記昭和32年〕＜石橋湛山関係文書（その一）892＞

「昨年十二月十四日党大会（産経会館にて）において鳩山氏より総裁辞
任の表明ありて直ちに新総裁選挙。決選投票により石橋当選、岸及び石
井両候補と握手して無事終了。」と記されている（傍線）が、今回の追
加分の中にその時の写真（写真10）も含まれている。



写真10 〔アルバム 総理大臣就任時〕＜石橋湛山関係文書（その一）913＞
握手する総裁選後の三人。左から石橋湛山、岸信介、石井光次郎

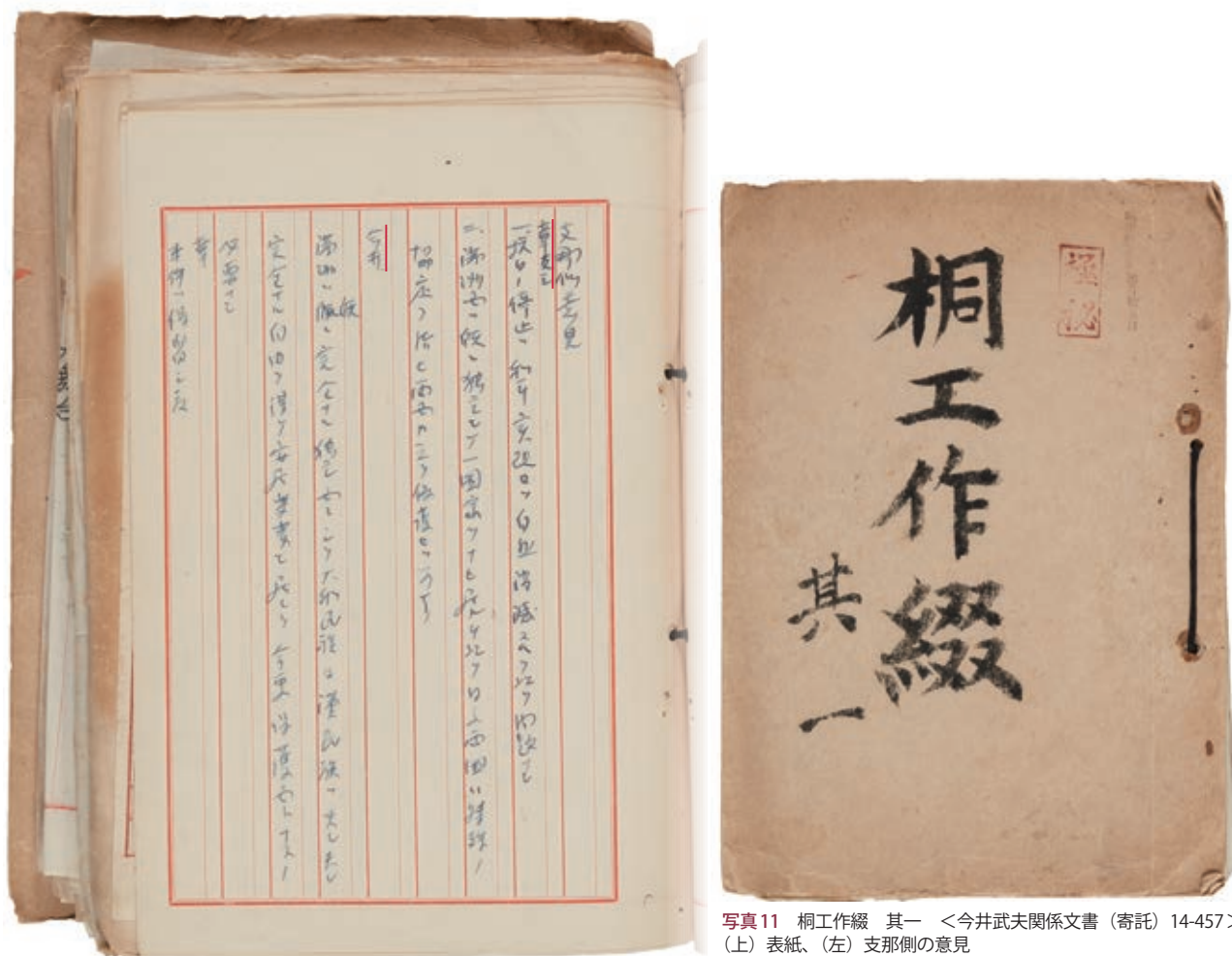


写真11 桐工作綴 其一 <今井武夫関係文書（寄託）14-457>
（上）表紙、（左）支那側の意見

いまいたけお 今井武夫関係文書（寄託）

（三六三八点 令和六年一月公開）

昭和一二（一九三七）年に始まった日中戦争は、中国側の抵抗によって戦局が膠着します。困った日本はさまざまな和平工作を水面下で試みますが、「桐工作」もその一つでした。昭和一四年九月、支那派遣軍総司令部参謀に就任した今井武夫は、さつそく鈴木卓爾中佐を香港に派遣し、「宋子良」（蒋介石夫人の宋美齡の弟）と交渉を進めさせます。そして、ついに翌一五年三月七日に香港で会談が始まりました。会談は主に今井と重慶国民政府最高国防会議秘書主任・章友三の間で進められました。今井は写真11のように、章友三と今井（傍線）の間の緊迫したやり取りを詳細に残しています。

このちも、同年六月にマカオで二回目の会談が開かれ、さらに最大の争点であった満洲国承認問題解決のため、蒋介石と支那派遣軍総参謀長・板垣征四郎が直接会談することにも予定されましたが、並行して進められていた「汪兆銘工作」の進展や、日独伊三国同盟の締結などで両国関係はいつそう悪化しており、結局九月に支那派遣軍は「桐工作」の中止

を決定しました。これを受け今井は、写真12にあるように、日本の命運にかかわる重要な任務を果たせなかったことを痛感し、自らの進退伺いを提出しましたが、慰留されたようです。なお、のちに「宋子良」が本人ではなかったことが分かりました。

今井武夫（1898-1982）

明治31（1898）年、長野生まれ。長野中学を卒業後、陸軍に入隊し士官学校、陸軍大学校と進み、昭和3（1928）年同大学校卒業。その後は参謀本部、在外機関、陸軍省に所属しながらもつばら中国関係の業務を担当し、中国要人との関係を深める。昭和12年の日中戦争勃発後も支那派遣軍総司令部参謀、大東亜省参事官を歴任し、桐工作など中国との停戦交渉を重ね、昭和20年の終戦の後も復員交渉にあたった。昭和57年死去。

肖像写真の出典：『支那事変の回想』みすず書房、1964
（<https://dl.ndl.go.jp/pid/2989491/1/5>）



進退伺書

武夫儀

支那派遣軍參謀トシテ謀略擔任ヲ命セラレ
桐工作ノ實施並指導ニ當リテ以來事變
處理ニ貢獻スル所アラントシテ自ラ其成功ヲ
冀求シツツ熱誠ヲ傾ケテ努力シタレ共重慶
政權動向ニ基ク工作實施上ノ處置適
切ナラスシテ未ク有終ノ美ヲ收ムル能ハス
時恰モ新中央政府樹立セララルマリ全支
包括ノ必要性情倍加シタルノミナラス更ニ歐洲
情勢ノ激變ニ際會シ帝國ノ迅速且全面

写真12 支那派遣軍總司令官西尾壽造宛進退伺書
＜今井武夫關係文書（寄託）14-458＞

的事變解決ニ對スル要請極メテ切ナルモノニ
拘ラス任再トシテ時期ヲ遷延シ空シク回
天ノ好機ヲ逸スルノ結果ヲ招來シタリ
固ヨリ事變處理ニ寄與センガ爲メニハ今
後更ニ既往ノ經驗ヲ教訓トシテ一層粉
骨碎身以テ工作ノ完成ヲ期セサルヘカ
ラスト雖而モ過去ノ実績ハ自ラ不明不
識ノ致ストコロナルコトニ疑ナク加之其結果
ノ影響スル所廣汎且深刻ナルニ想倒セハ
菲才ノ身能ク贖罪シ難キヲ痛感シテ
自責ノ念ニ堪ヘス

依テ茲ニ謹テ進退ノ儀御伺ヒス

昭和十五年十月八日

支那派遣軍參謀

陸軍大佐

今井武夫



支那派遣軍總司令官西尾壽造殿

三島弥太郎関係文書（二〇二四年公開分）

（六〇〇点、令和六年三月公開）

The house of Commons is very small, and also the audience hall – the members have the hats on, and take them off when they speak – the clerks and the speaker have whigs (whigsはwigsの誤記か)

のちに日本銀行総裁と貴族院議員を務めることになる三島弥太郎の旧蔵資料です。彼は明治一七（一八八四）年に一八歳で渡米して害虫学を修め、父である三島通庸（警視總監）が亡くなった際に帰国して子爵を継ぎました。明治二二年に再渡米し、コーネル大学大学院で学位を取得して同院の研究生となりさらに研究を進めますが、その翌年病氣により学業をあきらめ、ヨーロッパ

を巡ってから明治二五年に帰国しています。

当時の日記が数冊残されており、それらを紐解くと、天気、起床、就寝の時刻を含めて見聞したことが丁寧な筆記体で記されています。明治二四年六月一九日には、英国議会の下院を見学し、議場の小ささや、議員がかぶっている帽子を発言時に脱ぐこと、議長や書記官が髪をかぶっている様子をしたためています。

当日の英国議会上院議事録をめぐってみると、工場法の改正案が議題にあがっていました*。日本でもすでに帝国議会が開催されており、六年后に貴族院議員となる三島弥太郎ですが、この時は初めて見る英国議会の様子を淡々と観察していたようです。

* https://assets.parliament.uk/Journals/HCI_volume_146.pdf 378コマ目（本文376p）に「Factories and Workshops Bill」とあります。

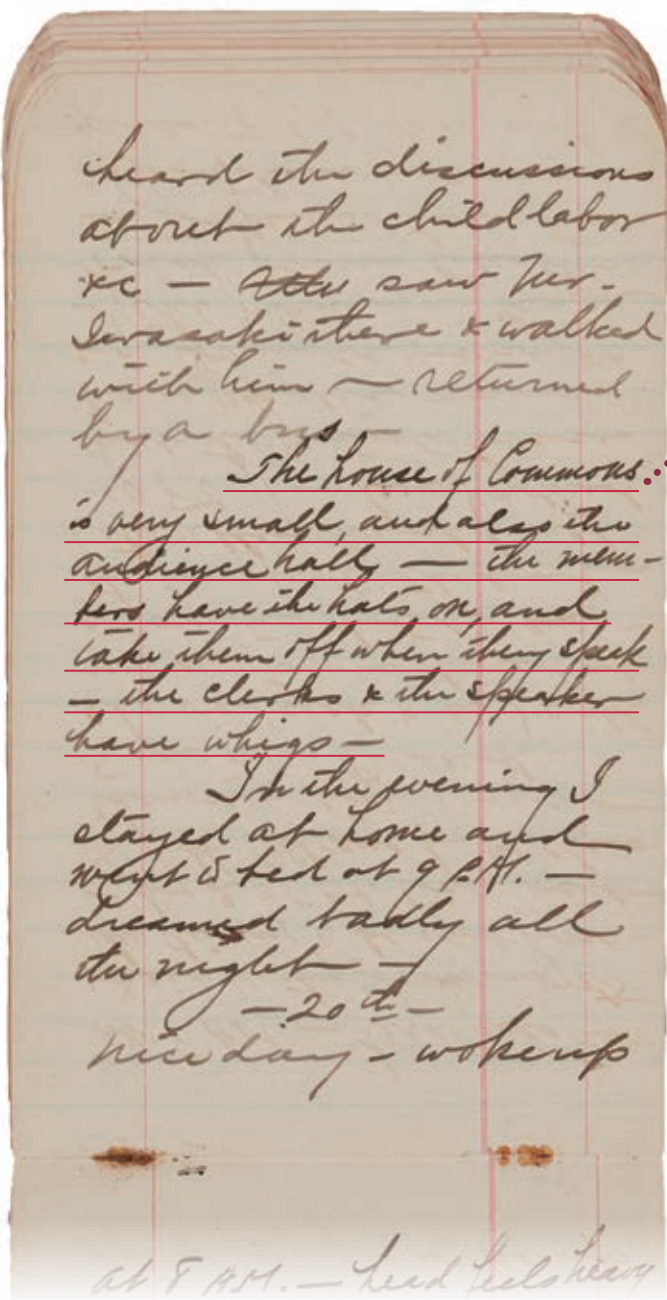


写真13 [英文日記2] 明治24(1891)年6月19日 <三島弥太郎関係文書5392>

三島弥太郎（1867-1919）

慶応3(1867)年、鹿児島生まれ。明治25(1892)年以降は農商務省等に勤め、明治30年に貴族院議員に当選し、財政問題を中心に論を立て活躍する。明治39年に横浜正金銀行に入り、のちに取締役、頭取を務める。大正2(1913)年に日本銀行総裁となる。大正8年に死去。

肖像写真の出典：「近代日本人の肖像」
(<https://www.ndl.go.jp/portrait/datas/487/>)



昨年『週刊朝日』へ当館請求記号Z24-18Vの休刊が話題になりました。大正時代に創刊されたこの週刊誌（創刊当初は旬刊）は101年の歴史にいったん幕を閉じました。当館に届いた最終号を目の前にして、これまで積み重ねてきた受入記録（蔵書登録のデータ）を振り返ったとき、その膨大な号数と時間の経過にあらためて圧倒されました。

私たち逐次刊行物・特別資料課受入係は、日本国内で刊行された逐次刊行物、大雑把に言えば雑誌・新聞など（冊子やCD・ROMなど有体物に限る）を当館の蔵書として受け入れるプロセスの入口にいます。これら雑誌・新聞などは、発行者からの納本を中心に、1日に約1800点、多い日には3000点に迫るほど届きます。受入係は、届いた雑誌・新聞一点一点につき、①汚れや破損、ページの欠落はないか、②タイトルや形態などに変化はないか、などを確認し、データ登録していきます。

この作業は思いのほか単純には済みません。特に②では慎重な調査が必要なケースに日々出くわします。たとえば別の雑誌と合併したりウェブ公開に移行したり、その変遷の仕方もさまざまです。一つ一つの雑誌・新聞には個性があり、連綿と号

を重ねながらさまざまな変化を遂げていくので、まさに逐次刊行物は生きていると言えます。私たちはそうした変化を見逃さず、データ登録を確実なものとするよう努めています。

一方で、届いた号の確認だけでなく、これまでの納入状況や次号の刊行予定の調査も欠かすことができません。欠号はないか、ある号を最後に納本が途絶えていないか調べるのです。こうして未納が判明した際には、発行者に納本にご協力いただくよう依頼し、「創刊号からすべて」揃っているという所蔵状況を実現すべく努力しています。

受入係の「受入」という言葉には「納本資料を受け入れる」という受動的なニュアンスを感じるかもしれませんが、受入係は刊行物の変化をキャッチしたり調査の上で納本を依頼したり、という能動的な働きかけも職務としているのです。

驚くべきことに毎日のように創刊号が（最新刊に限らずバックナンバーとしても）やってきます。そして毎日のように最終号がやってきます。受入係は、一つ一つの雑誌・新聞のはじまりからおわりまで、その生涯におけるさまざまな変化をも含めて見届けるのです。

（逐次刊行物・特別資料課受入係 マーサ・マイ・ディア）



チェックカード。システム導入前の古い時期の受入記録で、よく参照します。
開館まもない昭和20年代の職員の筆跡もあり、時の積み重なりを感じます。

雑誌・新聞の生涯
—そのはじまりから
おわりまで—





令和6年度企画展示

ひろげて、
まいて、あらわれる

写し、伝えられた物語の楽しみ

十二類巻物 住吉如慶 写 寛文1(1661)年



石山縁起 写

入場
無料



東京会場

会場 国立国会図書館東京本館 展示室 (新館1階)

会期 令和6年10月1日(火)から11月9日(土)まで

※日曜、祝日及び資料整理休館日(10月16日)は休館

時間 10:00～19:00 (土曜日は17:00まで)

関西会場

会場 国立国会図書館関西館 地下1階大会議室

会期 令和6年11月15日(金)から11月29日(金)まで

※20日(水・資料整理休館日)、23日(土・祝)、24日(日)は休館

時間 10:00～18:00 (11月17日(日・関西館見学デー)は16:00まで)

掲載画像は、志貴山縁起 [江戸中期] 写、竹とり物語 [江戸前期] 写、百鬼夜行絵巻 [江戸中期] 写、
鳥羽僧正覚融絵巻 安達真速 写 明治26 (1893) 年より

展示会案内ホームページ》

<https://ndlsearch.ndl.go.jp/gallery/emaki>





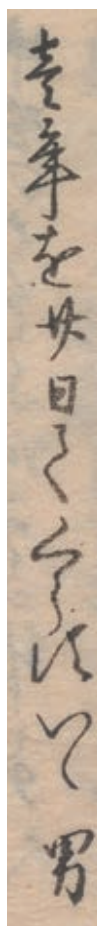
本の森を歩く 第三十回

一年を 二十日で暮らす いい男？

—国立国会図書館デジタルコレクションで楽しむ相撲—

西川 久司

壹年を廿日てくらすい、男



呉陵軒可有「ほか編」『柳多留』第44編 菊屋幸三郎（江戸後期）

△当館請求記号 W92・N77▽

「一年を二十日で暮らすいい男」

江戸時代に詠まれた川柳です。これはある職業についての句なのですが、その職業とは何でしょうか。

答えは力士です。

「20日？」関取なら本場所15日を年6場所、それ以外に地方巡業だつてあるじゃないか」と思う方がいることでしょう。たしかに現在はその通りですが、当時の相撲は今と大きく違いました。ニュースで時々「年6場所制以降では初めての記録」というフレーズを耳にすることがありませんか。年6場所制も1場所15日制も、ともに戦後になつてから定着した制度です。江戸相撲の

定場所は春秋の年2場所、1場所は晴天10日間で、この開催方式は明治の終わりごろまで続きました^①。ただ、川柳の詠まれた時代にも地方巡業を行つており、さらに大名家での御用などもありました。実際には本場所の20日だけ働けば済むというわけではなかつたようです^②。

この記事では、川柳の時代よりも少し下つて明治・大正の相撲に関連する資料を、国立国会図書館デジタルコレクション（デジコレ）に収録されているものを中心に紹介していきます。

『最近相撲図解』

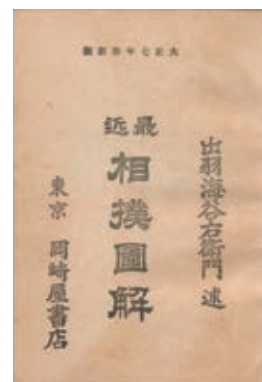
出羽之海谷右衛門 述 ほか
岡崎屋書店, 大正 7 (1918)
<https://dl.ndl.go.jp/pid/13706443>



決まり手・腰挫きの図解。ここで俗称として紹介されている「鯖折り」が現在では正式な決まり手名になっています。



常陸山が引退後、出羽ノ海親方となつてからの写真。



標題紙

『最近相撲図解』

今年生誕150年を迎えた第19代横綱・常陸山谷右衛門(1874～1922、横綱在位1904～1914)は「角聖」と

あり、とてもわかりやすい語り口です。そして、元力士・現役の親方ならではの裏話もあります。

呼ばれた名力士で、ライバルの第20代横綱・梅ヶ谷藤太郎(1878～1927、横綱在位1904～1915)^③とともに「梅・常陸」時代を築きました。引退後は年寄・出羽ノ海として出羽ノ海部屋を角界随一の大部屋へと育て上げたほか、力士の社会的地位の向上、初代国技館建設にも貢献しました。

三段目から幕下上位・十両近くまで昇進した力士について、力士社会ではもう兄貴分だから、幅を利かせるようになる、そのためこの辺で誘惑が多く、惜しいことに好機を逃して幕下止まりや三段目あたりをぶらつく者もかなり多い、いやそれが大多数だと言いつつ切っています。もしかしたら、出羽ノ海部屋にもこうした弟子がおり、親方として嘆いていたのかもしれませんが。

常陸山は現役時代・親方(年寄)時代を通して数冊の著書を残しています。ここでは引退後に出版された海名義で口述した一冊をご紹介します。

巻末には寄稿によるコラムがあります。劇作家・水谷竹紫の「相撲を面白く見る法」は、立ち上がりの一刹那の有利不利が取組全体に最も影響するので注意して見よと説くなど、令和の相撲観戦にも通用する内容です。一方、時代を感じる記述もあります。

常陸山の著書の中では現役時代の名著『相撲大鑑』(文運社、1909)が有名です。はしがきによると、歴史的な記述の多い『相撲大鑑』に比べ、この『最近相撲図解』は現在(大正時代)の相撲に紙幅を割いており、観戦の手引きや案内記という位置づけだそうです。本書で相撲のあらましを学んだ読者に『相撲大鑑』で造詣を深めてほしいとのこと。

観戦時に客席で大きな旗を広げるのは他の観客の妨害になって迷惑という主張は真っ当ですが、代わりに提案するのがなんと太鼓や銅鑼、突撃ラッパといった鳴り物を使った応援です。現在の大相撲ではもちろんそうした応援は禁止されており、野球場のように鳴り物の音が響く国技館などまったく想像が付きません。

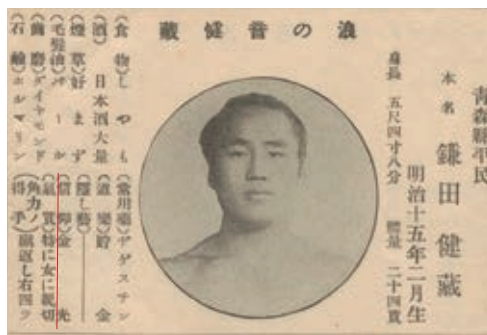
タイトルの「図解」は決まり手の紹介で使われています。本文は口述ということも

『相撲鑑』

杉浦善三 編

昇進堂, 明治 44 (1911)

<https://dl.ndl.go.jp/pid/13436688>



気質については「真面目」「陽気」「勝気」といったシンプルな紹介が多い中、浪の音は「特に女に親切」と妙に具体的に。



標題紙

小柳の紹介文。常に待った十数回は信じられないかもしれませんが、杉浦も一定の理解を示しています。それもそのはず、本書刊行の翌明治 45 (1912) 年の五月場所では平幕千年川が横綱太刀山に対して待った 54 回、仕切りに 1 時間 37 分を要する出来事がありました（取組は 2 秒で横綱の圧勝に終わっています）。待った 3 回で審判部から注意を受ける現代とは感覚が違ったのです。

『相撲鑑』

スポーツファンの中には選手名鑑を読むのが毎年の楽しみという方もいるのではないのでしょうか。本書は明治時代の力士名鑑です。

編者の好角家・杉浦善三（角界ではなく演劇の世界の住人でした）は本書を出版した理由について、番付には力士の名（四股名）しか書かれておらず、力士の経歴・実力・風采がわからないからそういう本を自分で作ったと述べています。

横綱の「梅・常陸」から平幕までの力士について、1 人 1 ページを割いて顔写真とプロフィール、紹介文が掲載されています。取り上げているのが幕内力士だけであることについて、杉浦は時間がない上に力士が地方巡業中なので遺憾ながら幕下連中を紹介できなかったと謝っています（当時は十両も幕下扱いでした）。

プロフィールは好きな食べ物・酒・煙草から、道楽や隠し芸・気質まで様々な項目があります。力士と言えはちゃんこ（鍋料理に限らず、相撲部屋における力士の食事全般のことです）にまつわるエピソードは外せません。「鰻井一ダース」（ありあけ）や「日本酒二升、ビール二ダース」（たまつばき）など、とてもない記述が並んでいます。「流行歌」

（碓氷、「歌一通り何んでも」（千年川）、「追分節」（大湊）など、歌を隠し芸とする力士が多いのは現在に通じるところがあります。

興味深いのは常用薬で、なんと幕内力士全員がデゲスチンという消化を助ける薬を飲んでたことがわかります。力士は膨大な量のちゃんこを食べており、それは稽古の一環でもあります。より多く食べ、栄養分を効率よく吸収するために消化剤を常用していたのでしょうか。

プロフィールだけでなく紹介文もユニークです。大緑について、品行が良く弱きを助け強きをくじく侠客肌という評判だが、最近拝金宗になったという噂があると述べ、大湊には、すべてに内気過ぎるのが欠点だ、しっかりしろ！と発破をかけます。

杉浦のコンセプト通り、番付ではわからない力士の人となりまでもが自由につづられた一冊です。

『古今相撲評話』

武俠世界社 編

武俠世界社, 大正 2 (1913)

<https://dl.ndl.go.jp/pid/13429605>



第 20 代横綱・梅ヶ谷藤太郎
(1878-1927、横綱在位 1904-1915、168cm・158kg)



第 17 代横綱・小錦八十吉
(1866-1914、横綱在位 1896-1901、168cm・128kg)



第 21 代横綱・若島権四郎
(1876-1943、横綱在位 1905-1907、178cm・107kg)



第 18 代横綱・大砲万右衛門
(1869-1918、横綱在位 1901-1908、195cm・134kg)
身長 195cm は歴代横綱の中でも長身の部類で、白鵬・照ノ富士 (ともに 192cm) といった令和の横綱すら上回っています。



第 22 代横綱・太刀山峰右衛門
(1877-1941、横綱在位 1911-1918、188cm・139kg)



第 19 代横綱・常陸山谷右衛門
(1874-1922、横綱在位 1904-1914、175cm・145kg)

※歴代横綱の在位期間、身長、体重はすべて日本相撲協会のプロフィールによります。

歴代横綱 日本相撲協会公式サイト <https://www.sumo.or.jp/Yokozuna/yokozuna/>

力士名	年	身長	体重	胸囲	前腕	後腕	腰	脚	上腕	大腕	脚	指
梅ヶ谷	今年	168	41	101	10	10	10	10	10	10	10	10
國見山	今年	168	41	101	10	10	10	10	10	10	10	10
太刀山	今年	168	41	101	10	10	10	10	10	10	10	10
玉椿	今年	168	41	101	10	10	10	10	10	10	10	10
千年川	今年	168	41	101	10	10	10	10	10	10	10	10
伊勢濱	今年	168	41	101	10	10	10	10	10	10	10	10
緑島	今年	168	41	101	10	10	10	10	10	10	10	10
稲川	今年	168	41	101	10	10	10	10	10	10	10	10
有明	今年	168	41	101	10	10	10	10	10	10	10	10
鶴渡	今年	168	41	101	10	10	10	10	10	10	10	10
柏山	今年	168	41	101	10	10	10	10	10	10	10	10
鏡川	今年	168	41	101	10	10	10	10	10	10	10	10
鬼龍山	今年	168	41	101	10	10	10	10	10	10	10	10
上ヶ沙	今年	168	41	101	10	10	10	10	10	10	10	10
氷見濱	今年	168	41	101	10	10	10	10	10	10	10	10

明治42（1909）年の西方幕内力士の体格表。梅ヶ谷は身長は5尺5寸4分（約168cm）と平均的ながら体重は最も重い41貫目（約154kg）で、アンコ型だったことがよくわかります。



標題紙



小錦は戦前屈指の人気力士で、「小錦織」という帯地が売り出されたほど。上は小錦織の商標です。実際にこういう柄の帯だったわけではありません。発売した西原合名会社は小錦のタニマチでした。

出典：商標登録 0005368（西原亦吉出願）

<https://www.j-platpat.inpit.go.jp/c1801/TR/JP-0005368/45/ja>

『古今相撲評話』

冒頭に写真が豊富に掲載され、横綱土俵入りの写真は第17代・小錦から第22代・太刀山まで6代を見ることができます（前頁参照）。

第17代横綱の小錦と第20代横綱の梅ヶ谷とともに身長168cmで、これは第9代横綱・秀の山（164cm）に次いで歴代横綱

戸時代や明治初期の力士たちについては概要や番付表の紹介にとどまり、小錦が新入幕した明治21（1888）年五月場所以降の四半世紀に全70章のうち60章以上を割いています。同場所以降の各場所について戦評や主要な力士の星取表を載せ、詳しく紹介しています。

の中で2番目に小さい数字です。2人ともタイプとしてはアンコ型（太っていて体が丸い力士）でした。梅ヶ谷は現在でもアンコのように見えますが、体重128kgの小錦をそう分類するのは写真を見ても違和感があるかもしれません。しかし、小錦の両脇に控える太刀持ち・露払いの筋肉質な体つきを見ると、当時の感覚ではこれでもアンコと呼ぶに十分だったことも想像がつかず。

第36章「梅常陸の一大決戦」では、明治35（1902）年一月場所千秋楽、当時大関同士だった「梅・常陸」のライバル対決で梅ヶ谷が常陸山を破った一番を約5ページにわたり取り上げています。立ち合いから梅ヶ谷がもろ差し、常陸山を吊り上げて土俵際まで運び、土俵に下ろしてすぐに寄り切るまでの描写は明快で、取組の様子が脳裏に浮かんできます。行司や勝った梅ヶ谷自身による解説も的確で、今でも相撲雑誌に掲載できそうな内容です。梅ヶ谷は理詰めの相撲では第一人者と評されたそうですが、それも納得できます。

常陸山を除く5横綱の写真には太刀持ち・露払いに加えて立行司が写っています。立行司が現在と同じ烏帽子に直垂姿なのは太刀山の写真だけで、第21代・若島までは無帽・麻袴です。これは太刀山の横綱昇進の前年である明治43（1910）年に行司装束が変更されたためです。変更の理由は諸説ありはつきりしていません。

本書はタイトルこそ「古今」ですが、江

そのほかに興味深いのは関取の体格表です。身長・体重（体重）だけでなく、大腿部（太ももの周囲の長さ）、指極（両腕を横いっぱい伸ばした長さ）ウィングスパン（といった細かい数値まで計測して載せており、各力士の体型を推察できます。

なりたりしょうすもうのあだうち 『成田利生相撲之仇討』

錦近堂, 明治 23 (1890)

<https://dl.ndl.go.jp/pid/12939008>



『成田利生相撲之仇討』の一場面

『成田利生相撲之仇討』

少し毛色を変えて、相撲を題材にした
フィクションを取り上げます。

歌舞伎の一ジャンルに、相撲を題材にし
た「相撲物」があります。大衆の娯楽とし

て人気がある相撲や力士を人気俳優に演

じさせることは興行的にもメリットが大き

かったそうです。本書のもとになった話も

そんな相撲物の一つ。桃川如燕（じょうえん）の講談を3

代河竹新七が脚色したもので、初演は明治

10（1877）年東京春木座、歌舞伎とし

ての一般的な外題は『やぐらだいこなりたのあだうち
樽太鼓成田仇討』です。

相撲が題材なので絵がダイナミックです。

大観衆の中で桂川が滝見山を投げ飛ばす

もともになった話のあらすじ

柔術の師匠を金目当てで殺した過去を持つ力士
滝見山（たきみやま）は逆手（ぎやくて）（相撲の禁じ手・反則技のこと）を
用いて雲の戸を破り、雲の戸は土俵の上で命を落
とす。

雲の戸の息子（じゅうじろう）十次郎は仇討ちを決意し、父の遺志
を継いで力士桂川力蔵（かつらがわりきさう）となった。桂川は成田山
新勝寺で21日間の断食修行を行い、不動明王から
力を授かる。

土俵で滝見山と対峙した桂川は逆手に頼ること
なく仇敵を投げ殺し、ついに仇討ちの本懐を遂げ
た。

仇討ちの場面（上図）には、雲に乗った不

動明王が靈力を発している様子も描き込ま

れています。歌舞伎でもこのシーンは迫力

があったことでしょう。

人気のあった話なので、デジコレにも

様々な資料が収録されています。元々講談

ということもあつてか登場人物の名前や細

かなストーリーにもバリエーションがあり

ます。

色々なバージョンの仇討ちシーンを並べ

てみました（次頁）。皆さんはどれがお好

きですか。

さまざまな仇討ちシーン



リアルなタッチの1枚。取り上げた中では唯一、桂川が左、滝見山が右に描かれています。

神田伯竜 講演『敵討桂川力蔵』 積善館、明治42（1909）

<https://dl.ndl.go.jp/pid/13729972/1/4>



あずまのはなうきようだん
『東錦浮世稿談』は人気の講談を月岡芳年が浮世絵にしたシリーズです。左上に仮名垣魯文による説明があります。

『東錦浮世稿談／森川馬龍』（国文学研究資料館所蔵）
山城屋甚兵衛版、慶応3（1867）年9月改印

出典：国書データベース

<https://doi.org/10.20730/200015178>



大日本雄辯會講談社（現：講談社）のヒットシリーズ「少年講談」の一冊。挿絵では桂川が喉輪で滝見山を攻め立てており、本文でも桂川が滝見山を圧倒する様子が描写されています。

石井滴水 絵『桂川力蔵 少年講談』講談社、昭和14（1939）

<https://dl.ndl.go.jp/pid/1169844/1/164>



絵では、雲に乗った剣（おそらく不動明王の倶利伽羅剣）が靈力を発している様子が描かれています。

永島辰五郎 編 ほか『〔絵本〕』〔3〕 成田利生角力仇討 下、宮田孝助、明治14（1881）

<https://dl.ndl.go.jp/pid/13729981/1/9>



絵では、倒れこむ滝見山を桂川が踏みつけている様子が描かれています。これは逆手に当たらないのでしょうか。

大西庄之助 編『〔絵本〕』〔20〕 復讐成田利生記 下、大西庄之助、明治13（1880）

<https://dl.ndl.go.jp/pid/13729979/1/10>

かんばんに生国を書くい、おとこ

かんばんに生国を書くい、おとこ

呉陵軒可有「ほか編」『柳多留』第31編 菊屋幸三郎 「江戸後期」

〈当館請求記号 W92・N77〉

最後に、江戸時代に詠まれた相撲にまつ
わる川柳をもう一句ご紹介します。

「看板に生国を書くいい男」

番付表に力士の故郷が書かれていること
を詠んだ一句です。現在の大相撲を見ても
出身地は番付に書かれ、また、土俵入りや
取組の前に四股名に続けて「○○出身、×
×部屋」とアナウンスされるなど、出身
地が所属部屋と並ぶ重要なプロフィールと
なっています。力士の地元で開かれるご当
地場所では応援がひととき盛り上がり、背
中を押された力士が好成績を残すこともし
ばしば。こうした地元との強い縁は、時代

を超えて受け継がれてきた相撲の伝統と言
えるでしょう。

今月は年内最後の本場所である十一月
場所（九州場所）が開催されます。九州
場所が5つ目の本場所となったのは昭和32
（1957）年のこと。翌年には七月場所名
古屋場所）が加わり、これ以降現在まで年
6場所制が続いています。

九州場所開始よりずっと昔、「二年を二十
日で暮らす」と言われた時代から変わった
もの・変わらないものに思いを巡らせ、同
郷の力士を画面越しに応援しながら大相撲
中継を観戦してみたいかがででしょうか。

1 明治42（1909）年本所回向院に初代国技館が完成して相撲が屋
内で行われるようになり、天候にかかわらず開催できるようになりま
した。大正12（1923）年に1場所11日制、昭和12（1937）年に
13日制、昭和14（1939）年から15日制となりましたが、昭和19（1944）
年に国技館が軍に接收されたため晴天10日間興行に戻りました。

2 一年を二十日で暮らすよい男 大相撲スペシャル「江戸・東京
デジタルミュージアム」古きをたずねて、新しきを知る。（東京都立
図書館ウェブサイト）

[https://www.library.metro.tokyo.lg.jp/portals/0/edo/tokyo_](https://www.library.metro.tokyo.lg.jp/portals/0/edo/tokyo_library/sumo/page2-1.html)
[library/sumo/page2-1.html](https://www.library.metro.tokyo.lg.jp/portals/0/edo/tokyo_library/sumo/page2-1.html)

3 横綱・梅ヶ谷藤太郎としては二代目にあたります。初代梅ヶ谷藤
太郎（1845-1928）はこの梅ヶ谷の師匠にして養父で、第15代横綱
（在位1884-1885）でした。

4 大相撲観戦時のお願い - 日本相撲協会公式サイト

<https://www.sumo.or.jp/IrohaOther/kansenji>

5 明治に入り鬘を落として武士の礼装である麻袴が似合わなくなっ
た行司の頭髪を烏帽子で隠すため、直垂の方が装飾性が高くなるた
めといった説があります。

行司装束 - 日本相撲協会公式サイト

[https://www.sumo.or.jp/KokugikanSumoMuseumDisplay/](https://www.sumo.or.jp/KokugikanSumoMuseumDisplay/wrap20181023/)
[wrap20181023/](https://www.sumo.or.jp/KokugikanSumoMuseumDisplay/wrap20181023/)

※ p. 23 の写真出典

『古今相撲評話』 武俠世界社編・刊、大正2（1913）

<https://dl.ndl.go.jp/pid/13429605/1/5>

<https://dl.ndl.go.jp/pid/13429605/1/6>



明治元（1868）年の番付の一部（西方）。番付上、地位と四股名の間には生国が書か
れます。生国として、実際に生まれた国名を書く力士（上の例では小結の東関）もいま
すが、藩に抱えられていた力士は藩名を書くことが通例でした。たとえば大関の鬼面山
は、生まれは美濃ですが阿波国徳島藩に抱えられていたため「阿州」とされています。
根岸治右門編『大相撲明治番附集』巻之1、根岸静次郎、大正5（1916）
<https://dl.ndl.go.jp/pid/13429603/1/3>



国際アンデルセン賞 受賞作家・画家展

The Hans Christian Andersen Awards



国際子ども図書館は、今年11月に創立50周年を迎える日本国際児童図書評議会(JBBY)と共催で、展示会「国際アンデルセン賞受賞作家・画家展」を行っています。

会期 2024年10月1日(火)から12月25日(水)まで

※月曜日、10月16日(水)、11月3日(日・祝)、11月20日(水)、
11月23日(土・祝)、12月18日(水)は休館

会場 国際子ども図書館 レンガ棟3階本のミュージアム

時間 9:30~17:00



国際アンデルセン賞は、児童文学への永続的な寄与に対する表彰として、国際児童図書評議会（IBBY）から隔年で贈られる国際的な賞で、「小さなノーベル賞」とも言われています。日本からは、赤羽末吉、安野光雅、まど・みちお、上橋菜穂子、角野栄子の5名が受賞しています。

今回の展示会では、1956年から2022年までに国際アンデルセン賞を受賞した全65名の受賞者の作品を、国際子ども図書館の所蔵資料から展示します。

この記事では、ダイジェストとして、5名の日本人受賞者を中心にご紹介します。

国際児童図書評議会（IBBY）と国際アンデルセン賞



IBBYの創設者であるイエラ・レップマン（Jella Lepman 1891-1970、左写真）は、第二次世界大戦直後の廃墟となったドイツで、子どもたちが本を通して国際理解を深め、平和な世界を築くことを目指しました。

国際アンデルセン賞は、3年の準備期間を経て1956年に第1回の授与が行われました。以来、隔年で選考されています。最初の3回（1956-1960年）は作品に対して賞が贈られていましたが、第4回（1962年）からは作家の全業績に対して贈られる賞となりました。また、第6回（1966年）には画家賞が創設されました。受賞者には、賞状とアンデルセンの横顔が刻まれたメダルが贈られます。

1980年

画家賞

赤羽末吉

(Suekichi Akaba 1910-1990)



18歳の頃、日本画の手ほどきを1年ほど受け、後は独学で絵を学びました。1932年、中国東北部に渡り、運送業、電信電話会社などで働きながら絵を描き、満洲国国展では特選賞を受賞します。帰国後は、GHQや駐日アメリカ大使館でデザイナーとして働きました。

和紙に墨のにじみを生かした水墨画の技法で、日本の湿潤な雪景色を描いた『かさじぞう』が初の刊行絵本となりました。『だいくとおにろく』では大和絵の技法、『水仙月の四日』ではボールペンを用いるなど、常に作品に適した画法を究め、『ほしになったりゅうのきば』、『スーホの白い馬』など、日本の子どもたちのために壮大なスケールの絵本を数多く作りました。



『スーホの白い馬』大塚勇三 再話、赤羽末吉 絵 福音館書店 1967

1984年

画家賞

安野光雅

(Mitsumasa Anno 1926-2020)

小学校の美術教員として働いたのち、42歳で『ふしぎなえ』を発表し絵本作家としてデビューします。画家、絵本作家、装幀家、文筆家として幅広く活動しました。

芸術の分野にとどまらず、科学や数学への造詣が深く、豊かな空想力と独創性に富んだ新しい絵本の世界を創造しました。また、旅する画家とも呼ばれ、多くの国でスケッチした風景を様々な形の作品として発表しています。

大変な読書家でもあり、安野と同郷の小説家である森鷗外(1862-1922)がアンデルセンの原書を雅文体で翻訳した『即興詩人』は、安野が生涯で最も大切にしていた本の1つでした。『平家物語』などの古典文学に新たな要素を取り入れた作品も描きました。

2001年に出身地である島根県津和野町に「安野光雅美術館」、2017年に京都市に「森の中の家 安野光雅館」が開館しました。



『ふしぎなえ』安野光雅 著
福音館書店 1971

1994年

作家賞

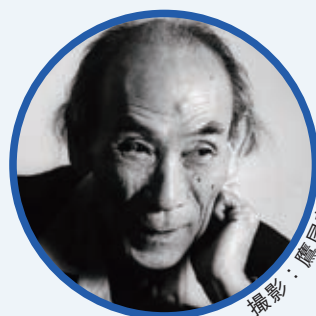
まど・みちお

(Michio Mado 1909-2014)

1934年に、初めて書いた童謡を雑誌『コドモノクニ』に投稿し、5篇のうちの2篇が特選に入ります。1948年から出版社に勤務し、1951年に童謡「ぞうさん」を書きます。1959年に退社した後は詩・童謡の創作に打ち込み、1968年以降は『まめつぶうた』など次々と詩集を出版し、100歳を過ぎても詩を書き続けました。

国際的に知られた日本の子どもの詩がほとんどなかった当時、日本人として初めて国際アンデルセン賞作家賞を受賞しました。

いのちの尊さを伸びやかに表現した、子どもにもわかりやすい作風です。美しく磨きぬかれた語呂合わせや頭韻を上手に使うことで、自然なリズムが生まれ、読者を楽しませます。まどの童謡や詩で育った日本の子どもたちは数世代にわたります。



撮影：鷹尾茂



『やぎさんゆうびん』まど・みちお さくし、渡辺有一 え
チャイルド本社 2010

2014年

作家賞

上橋菜穂子

(Nahoko Uehashi 1962-)

幼い頃に祖母から聞いた様々な口頭伝承や、中学生や高校生の頃に夢中になったイギリスのファンタジー文学の影響を受け、物語の創作への関心を高めていきました。大学では文化人類学の研究者としての道を歩む一方で、大学院在学中に執筆し、自ら出版社に持ち込んだ作品で作家デビューしました。

その後もオーストラリアの先住民アボリジニの研究を続けながら、フィールドワークで培った文化人類学の知見を生かし、アジアを思わせる異世界を舞台とする独自のファンタジー小説を多く手がけています。

これらの作品は、自然とあらゆる生き物への思いやりや畏敬の念に満ちており、アニメ化やドラマ化されたほか、欧米・アジアの多数の言語に翻訳されて海外でも人気を博しています。



『精霊の守り人』上橋菜穂子作、二木真希子 絵 偕成社 1996

2018年

作家賞

角野栄子

(Eiko Kadono 1935-)

ブラジルに滞在した体験をもとに描いた『ルイジンニョ少年 ブラジルをたずねて』で、35歳のとき作家デビューします。執筆のきっかけは、大学時代の恩師の勧めでした。これを機に、書くことの面白さに気づき、一生書いていくことを決意しました。

代表作『魔女の宅急便』は、スタジオジブリによる映画化を経て、番外編もふくめ9作が出版されました。多くの地域で翻訳されています。その他、〈アッチ、コッチ、ソッチのちいさなおばけ〉シリーズや自伝的作品など、数多くの子どもの向けの本を出しています。

父に読み聞かせをしてもらった幼少期の記憶から、言葉のリズムを大切にし、リズムカルな文体で作品を著しています。

2023年、東京都に「江戸川区角野栄子児童文学館（魔法の文学館）」が開館しました。



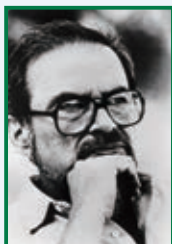
『魔女の宅急便』角野栄子作、林明子 画 福音館書店 1985

日本人受賞者のほか、以下の3名をはじめ、たくさんの作家・画家の作品を展示しています。

1970年

画家賞 モーリス・センダック

アメリカ (Maurice Sendak 1928-2012)



アメリカ人として初の画家賞を受賞したセンダックは、アニメーターのウォルト・ディズニー（1901-1966）を敬愛し、新しい文化に馴染む一方、ポーランド系ユダヤ人の移民の子という出自からヨーロッパの古典芸術の影響も深く受けました。ファンタジーと現実を見事に融合させたその作品は、子どもたちを大いに魅了します。



『かいじゅうたちのいるところ』
モーリス・センダック 著、じんぐうてるおやく 富山房 1975

1998年

画家賞 トミー・ウンゲラー

フランス (Tomi Ungerer 1931-2019)



フランスのアルザス地方のストラスブールに生まれ、アメリカで絵本作家としてデビューしました。へび、どろぼう、タコ、人くい鬼など、嫌われがちな人物や生き物が主人公の、風刺と毒気のきいたストーリー展開に、独特の異様な雰囲気イラストが特徴です。児童向け作品以外に風刺画や広告美術でも活躍しました。



『月おとこ』トミー・ウンゲラー 著、
たむらりゅういち、あそうくみや
く 評論社 1978

2022年

画家賞 スージー・リー

韓国 (Suzy Lee 1974-)



韓国人として初の授賞者となったリーは、自らを「視覚言語を使用する画家」と考え、言葉を使わない絵のみの絵本を多数作っています。とりわけ子どもの一瞬の動きをとらえた躍動感あふれる絵が、弾むようなエネルギーで物語を語っていきます。子どものもつ潜在的な力に深い信頼を寄せていることが見て取れます。



『かげ』スージー・リー 作 講談社 2010

ぜひ足をお運びください。

関連講演会（動画配信）

2024年10月6日（日）、角野栄子氏（動画出演のみ）と大阪国際児童文学振興財団の理事・総括専門員である土居安子氏をお迎えし、言葉と物語の力、角野作品の魅力についてお話しいただきました。動画をYouTubeの当館公式チャンネルで2024年12月25日（水）まで期間限定で公開しています。

角野栄子氏
<https://youtu.be/15YXY3kWblo>



土居安子氏
https://youtu.be/X-Z_XBa7aNg



本屋にない本



パブリックアート50年のあゆみ
文化・芸術に親しむ社会を目指して
1972-2022 50th anniversary

日本交通文化協会 編・刊
2022.9
127 p ; 32 cm
<請求記号 K111-M134>

駅を歩いていると、壁画のようなレ

リーフやステンドグラスに出会うことがある。なぜこんなところにあるのだろうと思う一方で、そこで待ち合わせる人々の姿を見ると、作品が生活の中に溶け込んでいることを実感する。このような公共空間にパブリックアートを設置する取組を進めてきたのが、公益財団法人日本交通文化協会（以下、協会）である。本書は、協会がパブリックアートの普及活動を始め、50年の節目の年を記念して出版された。作品紹介を中心に半世紀の活動を振り返っている。

協会が手掛けるパブリックアートは、耐久性に優れた陶板やステンドグラスを素材にするものが多い。第1章では協会が設置した作品の中から、15

作品を大きな写真と共に紹介する。コン

パクトな解説と制作風景や点灯式の様子などもあわせて、カタログのようにして楽しめる。作品の前で待ち合わせる人々や清掃活動の様子など、作品がどのように地域住民から愛されているかは、第3章で取り上げられている。作品の設置を機に新たな行事が開催されるようになった地域もあるようだ。

パブリックアート制作の特徴のひとつは、様々なジャンルの作家が原画を担当することにあるだろう。第2章では原画作家のインタビューが掲載され、制作秘話やパブリックアートへの思いが語られる。特にこれまで陶板やステンドグラスに触れることのなかった画家や漫画家が、戸惑いながらも制作と向き合った体験談が興味深い。

原画から陶板やステンドグラスを制作する上で中心となっているのが、ク

レアーレ熱海ゆがわら工房である。第4章では同工房の歴史や制作工程がテーマとなる。例えば陶板の材料となる土は山によって土質が異なるため焼成実験が欠かせず、釉薬は原画の色を出すために100点以上作ることもあるそうだ。また金属加工会社の日崎工業株式会社は、ステンドグラスを組み込む筐体などの製作に協力している。その製作エピソードは、作品の表現を追求しながら安全性を確保するには熟練の職人の技術が必要不可欠であることをうかがわせる。

パブリックアート普及のために協会が法制化を求めているのが、公共工事費や公共建築費の約1%を付随する

アートに充てる「1%フォー・アート」という制度である。第5章ではその概要と建築家や学者の声が紹介される。またパブリックアート振興に邁進して

きた滝久雄理事長のエッセイも見逃せない。特に原画制作を作家に頼み込んだエピソードや、協賛企業や設置場所の管理者との交渉秘話は、様々な人の協力があつて初めてパブリックアートが完成することを物語っている。

巻末には協会が全国に設置した551作品の画像付き作品総覧がついている。地元や旅先のパブリックアートをここから探してみるのも楽しそうだ。

（重黒木南帆）

国立国会図書館は、法律によって定められた納本制度により、日本国内の出版物を広く収集しています。このコーナーでは、主として取次店を通さない国内出版物を取り上げて、ご紹介します。

第17回科学技術情報整備審議会

8月9日、第17回科学技術情報整備審議会がハイブリッド方式で開催され、審議会委員・専門委員15名のほか、館長、副館長、幹事等職員16名が出席しました。委員の互選により安浦寛人委員が委員長に選任されました。続いて、安浦委員長が竹内比呂也委員を委員長代理に指名しました。

審議会では、第六期国立国会図書館科学技術情報整備基本計画の策定に向けて、基本方針検討部会を設置することが、審議の上、決定されました。安浦委員長から野末委員が部会長に、池内専門委員、生貝専門委員及び大向専門委員が部会員に指名されました。

また、当館から第五期国立国会図書館科学技術情報整備基本計画の進捗について報告した後、質疑および懇談が行われました。懇談では、渡部委員から国文学研究資料館のデジタル戦略について、野末委員から図書館における情報リテラシー教育について、それぞれ話題提供していただきました。委員・専門委員からの主な意見は次のとおりです。

- ・デジタル化が進展したことは評価できる。今後のさらなる尽力に期待しつつ、国際的な視点での取組や、教育機関での利活用を推進する取組にも目を向けてほしい。
- ・生成AIによるハルシネーション（幻覚）の問題もあるので、最新の情報と図書館の情報とを結びつけたうえでの批判的思考が大事になる。
- ・デジタル情報基盤の整備やその利活用を進める際、民間や縁縁機関との役割分担が重要となるので、国立国会図書館にその旗振り役を担ってほしい。

科学技術情報整備審議会委員名簿

(五十音順 敬称略) (令和6年8月9日現在)

委員長

安浦 寛人

九州大学名誉教授

委員長代理

竹内 比呂也

千葉大学副学長、附属図書館長、アカデミック・リンク・センター長、大学院人文科学研究科教授

委員

浅川 智恵子

日本科学未来館館長

池谷 のぞみ

慶應義塾ミュージアム・コモンズ機構長、慶應義塾大学文学部教授

大隅 典子

東北大学副学長、附属図書館長、大学院医学系研究科教授

黒橋 禎夫

情報・システム研究機構国立情報学研究所長

小口 正範

日本原子力研究開発機構理事長

戸山 芳昭

国際医学情報センター理事長

野末 俊比古

青山学院大学教育人間科学部長・教授

橋本 和仁

科学技術振興機構理事長

林 隆之

政策研究大学院大学政策研究科教授

松浦 重和

文部科学省大臣官房審議官（研究振興局及び高等教育政策連携担当）

村山 泰啓

情報通信研究機構NICTナレッジハブ・研究統括、ナレッジハブ長

渡部 泰明

人間文化研究機構国文学研究資料館長

専門委員

池内 有為

文科大学文学部准教授

生貝 直人

一橋大学大学院法学研究科教授

大向 一輝

東京大学大学院人文社会科学系研究科准教授

*審議会に関する情報は、左記に掲載しています。

ホーム▽事業紹介▽資料の収集▽科学技術情報整備▽科学技術情報整備審議会

<https://www.ndl.go.jp/jp/collect/tech/council/index.html>



第17回科学技術情報整備審議会

韓国国立中央図書館との第24回業務交流

7月8日から13日まで、韓国国立中央図書館（ソウル）において標記の業務交流が行われ、国立国会図書館から、小澤弘太総務部企画課長をはじめ3名の代表团が参加しました。韓国国立中央図書館からは、キム・ヒソプ（金熙燮）館長ほか関係職員が多数参加しました。まず基調報告として、両館の現況と課題について双方から報告しました。「両国内のデジタル文化遺産（Digital Cultural Heritage）における連携協力—Korean MemoryとJapan Searchの取組を通じて—」をテーマとするセッションでは、韓国のデジタルアーカイブ・キュレーションプロジェクトであるコリアンメモリーと、日本国内の様々な分野のコンテンツを検索・閲覧・活用可能にするプラットフォームであるジャパンサーチの、それぞれにおける取組と連携協力について報告しました。「児童・青少年サービスの現状と課題—先端技術を活かしたサービスを中心に—」をテーマとするセッションでは、韓国からは、先端デジタル技術を活用した国立子ども青少年図書館のサービスの現状について、また、当館からは、国際子ども図書館におけるデジタルコンテンツ構築と活用の取組について報告しました。各セッションの質疑応答では、両館の課題や今後の展望に関し活発な意見交換が行われました。



当館代表团と韓国国立中央図書館館長・同館職員

新刊案内

令和5年度国際子ども図書館児童文学連続講座講義録

「幼年童話の可能性—聞いて、読んで、物語の世界へ—」

幼年童話概論

幼年童話にみるジェンダー—育児の描かれ方を中心に—

に—

子どもの人間形成と幼年童話

幼年童話人気シリーズに学ぶ子どもの心のとらえ

方、ひろげ方

国際子ども図書館の小学生向けサービス



A4 96頁 年刊 2,090円（税込）
ISBN 978-4-87582-932-4
発売 日本図書館協会

NDL Topics

外国の立法 立法情報・翻訳・解説 第301号

EUにおける政治広告透明化規則の制定
フランス…インターネット上の著作権保護に関する
法律の改正―視聴覚・デジタル通信規制機関の設
立―
オーストラリア…2020年国家緊急事態宣言法



A4 91頁 季刊 1,980円 (税込)
ISBN 978-4-87582-933-1
発売 日本図書館協会

レファレンス 884号

NATOの多国籍作戦における指揮・統制
米軍のPFAS問題―国防省の取組を中心に―
投資減税の有効性―その国際的な実施状況と議論―
精神科病院における身体的拘束



A4 88頁 月刊 1,100円 (税込)
発売 日本図書館協会

レファレンス 885号

高レベル放射性廃棄物処分の経緯と現状―我が国と
諸外国の動向―
事業場における労働者過半数代表制の動向と課題
アイルランド憲法と家族―憲法改正(家族)法案を
めぐって―

台湾における偽情報の拡散―2024年台湾総統選
を中心に―



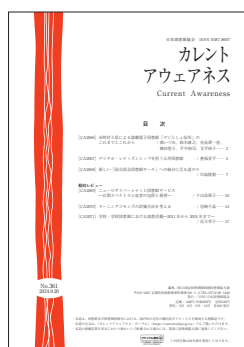
A4 96頁 月刊 1,100円 (税込)
発売 日本図書館協会

カレントアウェアネス 361号

市町村と県による協働電子図書館「デジとしよ信州」
のこれまでとこれから
デジタル・シティズンシップを担う公共図書館
新しい「国立国会図書館サーチ」への統合に至る道
のり

△動向レビュー

ニューロダイバーシティと図書館サービス―自閉ス
ペクトラム症者の包摂と展望―
ラーニングコモンズの評価方法を考える
学校・学校図書館における読書活動―2011年か
ら2024年まで―



A4 24頁 季刊 440円 (税込)
発売 日本図書館協会

入手のお問い合わせ

日本図書館協会

〒104-0033 東京都中央区新川1-11-14

電話 03(3523)0812

本誌の読者アンケートを実施しています

『国立国会図書館月報』のより良い誌面作りを目指し、6月25日（火）から12月5日（木）まで読者アンケートを実施しています。皆様から寄せられましたご意見・ご感想を、今後の企画・誌面作りの参考にさせていただきます。

以下のURL、QRコードからアクセスし、ウェブフォームでご回答ください。読者の皆様のご回答をお待ちしております。

アンケート URL

<https://enquete.ndl.go.jp/131776/p/GNO>



NO.763

NOVEMBER
2024

CONTENTS

- 01 <Book of the month - from NDL collections>
A Fascinating Anthology of Miscellaneous Correspondence:
Tegami zasshi, Vol.1, No.1
- 05 Lecture: The Past and Future of the National Diet Library
- 12 Materials newly available in the Modern Japanese Political History
Materials Room
- 23 Strolling in the forest of books (30)
Manly men who only work 20 days in a year?
Enjoy sumo in the Digital Collections of the National Diet Library
- 31 Exhibition at the International Library of Children's Literature
The Hans Christian Andersen Awards
- 21 <Tidbits of information on NDL>
The Life of Magazines and Newspapers: From the first issue to the last
- 36 <Books not commercially available>
Paburikku ato 50nen no ayumi: Bunka geijutsu ni shitashimu shakai o mezashite: 1972-2022 50th anniversary
- 37 <NDL Topics>

国立国会図書館月報

令和6年11月号 (No.763)

令和6年11月1日発行

発行所 国立国会図書館
編集者 川西晶大

印刷所 株式会社丸井工文社

〒100-8924 東京都千代田区永田町1-10-1
電話 03 (3581) 2331 (代表)
FAX 03 (3597) 5617
E-mail geppo@ndl.go.jp
<https://www.ndl.go.jp/>

本誌に掲載した論文等のうち意見にわたる部分は、それぞれ筆者の個人的見解であることをお断りいたします。
本誌に掲載された記事を転載する場合（全文または長文にわたり抜粋する場合、または図版を転載する場合）には、
事前に当館総務部総務課にご連絡ください。
本誌517号以降、PDF版を当館ホームページ（<https://www.ndl.go.jp/>）>刊行物>国立国会図書館月報でご覧いただけます。



NATIONAL
D I E T
LIBRARY
MONTHLY
BULLETIN
2024.11

 国立国会図書館
National Diet Library, Japan

図

国

国

書

人

士